

門ル
號5105
卷19

昭和41年12月20日
原安三郎氏贈

三園稻荷社

小梅村田の中小あり

別當の天台宗延命寺と

号と神像の弘法大师の作と同大师の勧請ありと文和

年間二井寺の源慶僧都再興と慶長の頃迄今之北山南の方

ゆりて以後此地より移じて當社の内陣より一蝶の畫あり牛若丸と

辨慶り半身の圖を掲たる

五元集 牛鳴あらうの神前より雨乞する

夕立や田をもめくもの祈り

宝晋寺
其角

社僧云元禄六年の夏大旱魃とあるより六月の廿八日村民あらずて神前よりひ請雨の

祈願と其日旱魃も當社より詣せよ体ひし人の中に能くとあるあり其角より請雨の餘計を乞ふ

うすめりんの農民よりもくるを連ねて當社の神前よりうりに感應やうりあんその日膏引

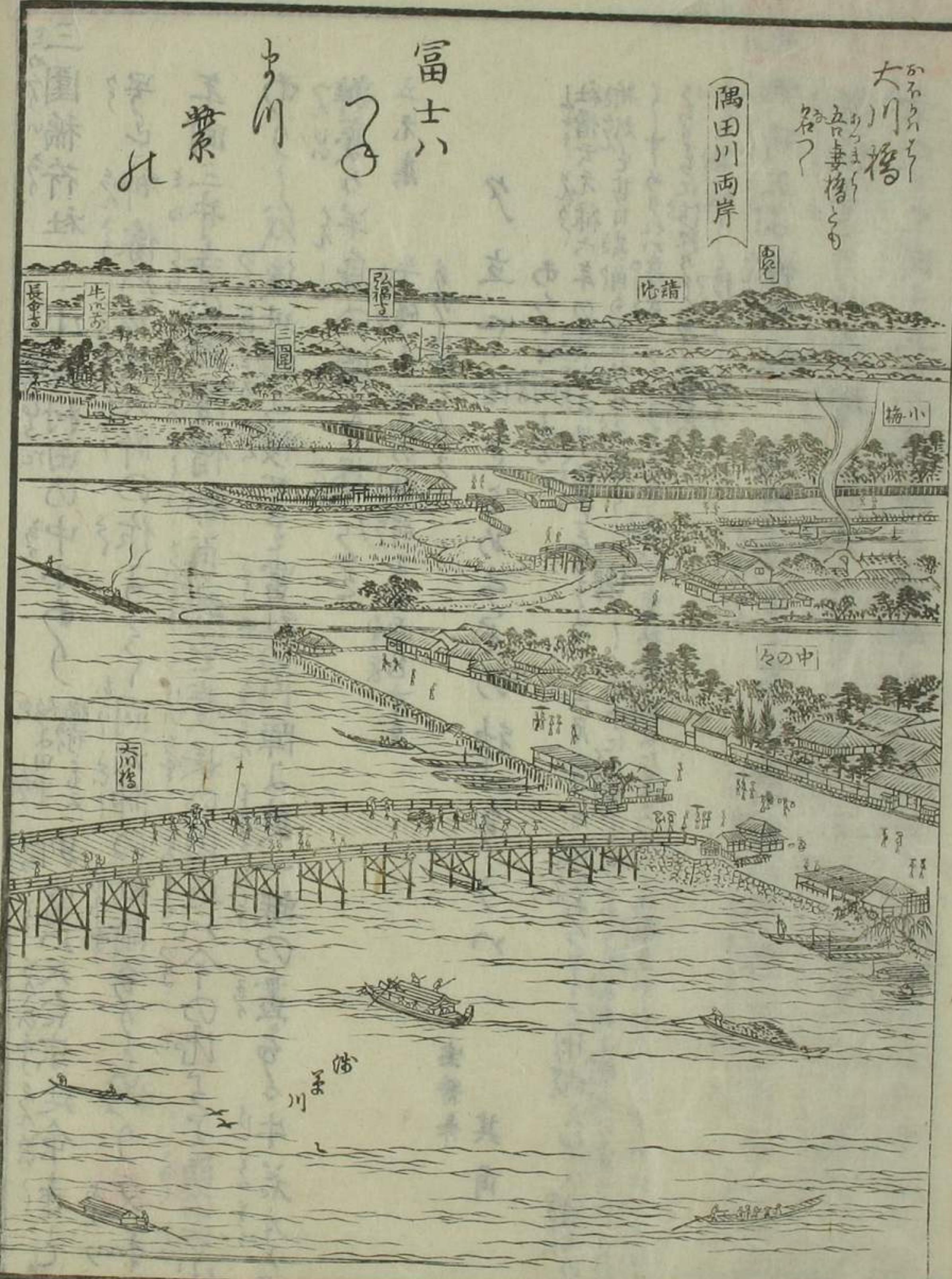
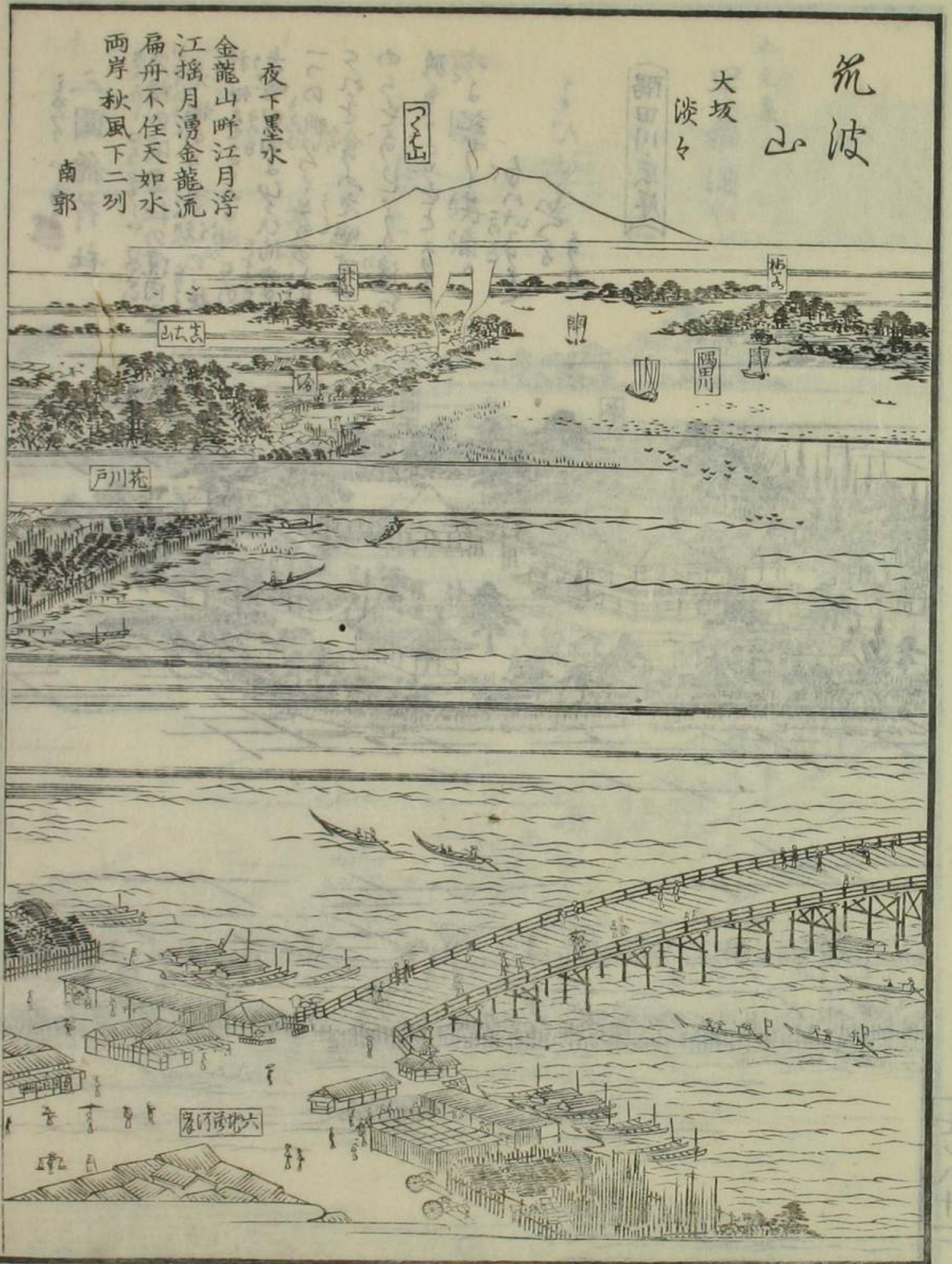
なまきにほれども其草へ今もあれば

御前王子權観社 同所北の方より別當の最勝寺と号と牛鳴の

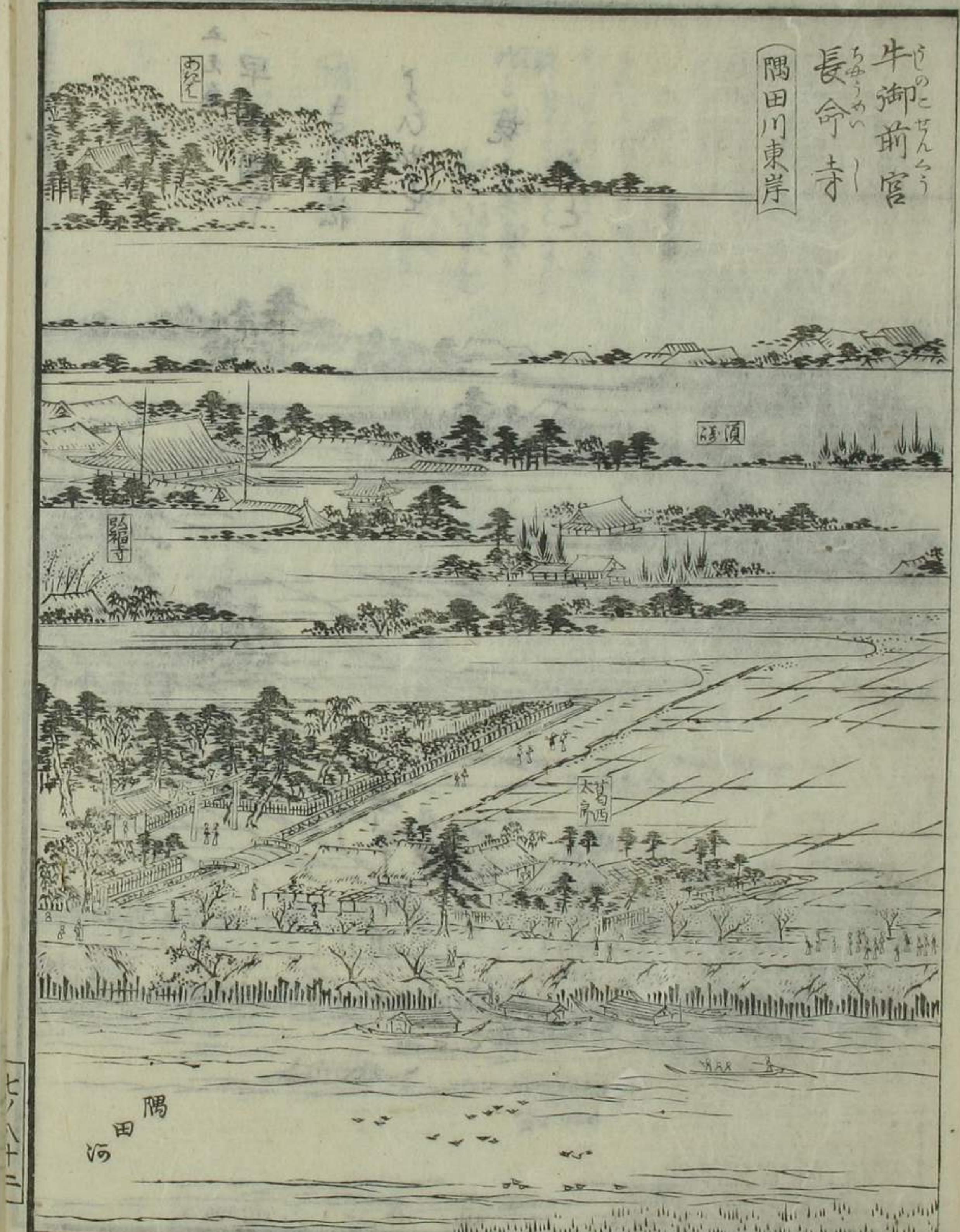
總鎮守として祭禮の際年九月十三日北本町石原新町の旅所へ神

幸ゆて同十五日小帰輿を祭神素盞烏尊と號と清和天皇第七



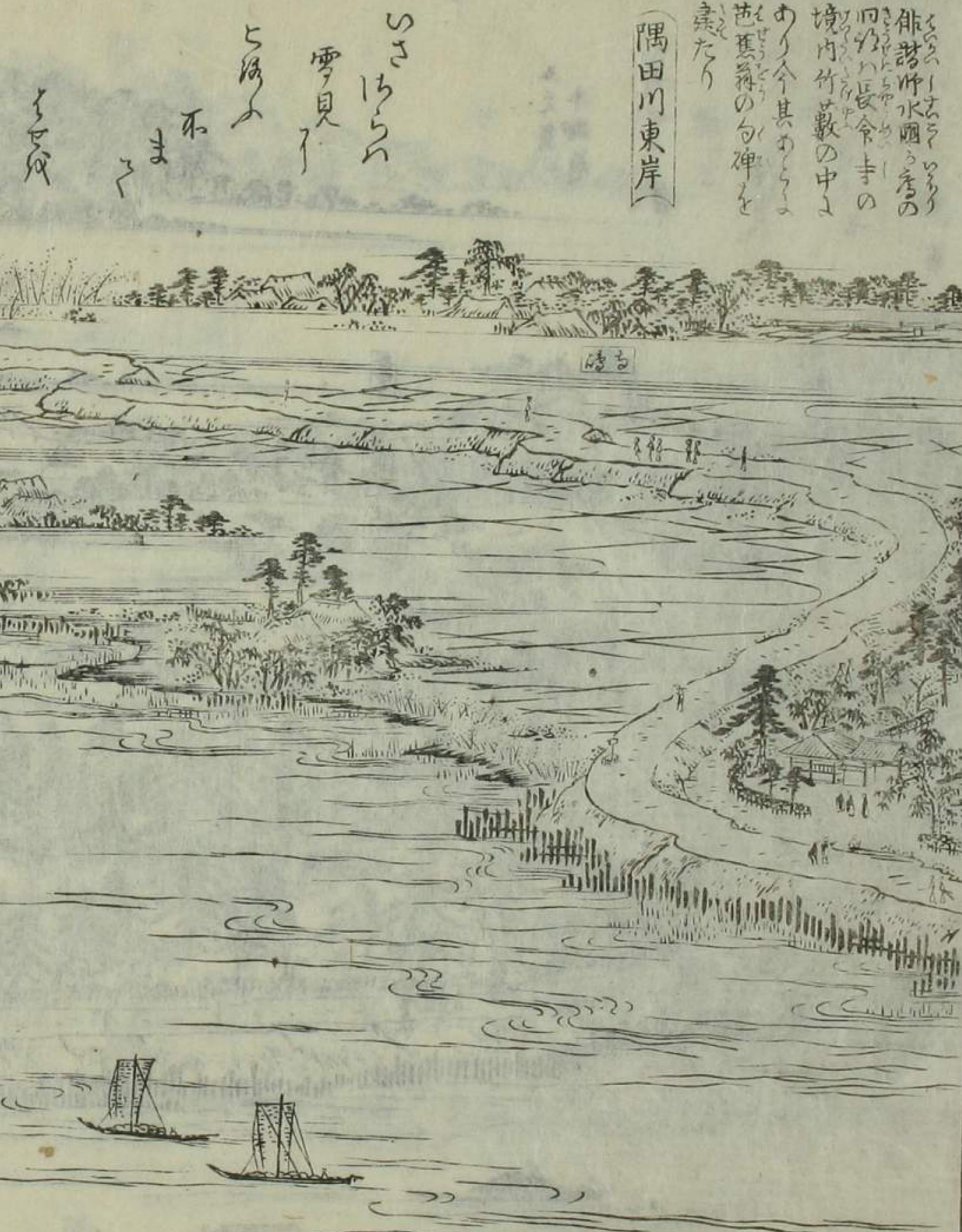






能勝神水國の
長令寺の中
の今其あらう
舊釋の句神を
達たり

隅田川東岸



皇子玉祖權現共ニ坐り相傳清和天皇の御宇貞觀二年庚辰秋
九月慈覺大師東圓弘法の須素蓋鳥尊位冠の老翁と化観
此地又跡を出永く幽家を守護せんと告ゆ
仍大師一社奉
上足の良本阿闍梨を留て是役守り
尚社の本師佛大日如來の像良本師彌勒と云
又五十七代
陽成院の御宇清和帝第七の皇子當圓又延祐をたす
元年丁酉九月十五日此地又於て薨
依岡山良本阿闍梨と小
葬を奉
牛御前の相殿よ合祭す
奉ると云
其後靈告ありて云く
素蓋鳥尊第の御子
生を留めをゆへと云
或人云尚社を牛御前と稱すからすのゆ
牛鳴の出荷と云
之を譽して平吉崎と唱へたりしを後世記りて崎と前々書あらためられを拂前と稱せ
ふと云り
故又攝列勝田御崎荒前童拂其餘相別の二寺大江戸の月岬等とて海に臨むる也
今尚社の近を須素蓋鳥尊と名づくものゆゑ此辺のち御りと其頃の文宗も例作たりしと
かくゆくへ極きるゝ蒼海又復して年を歷く陸地とよりて次の寺唐道寺の茶屋
はまたひらくり其條りをゆるを以て牛の御崎とする説も有るに似たりする時此の寺の
御宇の美を序と一時の文宗を前より書あらひ再びサキの刻を前より持てて云ふと
されと神号と傳前と稱すりの又人のうつゆを用ひたりと御其例ありらしく譽すよりと
ゆらと故よこれを異と

法華經千部供養碑 今内陣より取てあり長三尺三寸をあり闊ハ壹尺六寸あまり厚さ二寸弱あり

碑陰銘

奉造立釋迦像一軀
貞觀十一年丁未天三月日

碑へ往く當社境内の土中より富得て今本殿の中より收じ青石すと其質の如て
堅一上下無損して全かりて碑面又立像の釋迦像の尊容を刻し碑陰に直塘す
數字を鶴等としうちも法華經千部供養碑等の文を刻す
千葉五郎胤道旗 一流 別當最勝寺より移して東溫又治承四年庚子九月十九日
武房上総權从廣帝より奉入をすと總の御席より會すと之る事下に西房五郎胤道の
名を加へたる淮后親房記より壽永三年二月六日謙倉より福原一之助の中より常胤道
幽府五郎胤道同於東六郎省頼等の名あり胤道の常胤の同胞すと母は秋父即重弘の女あり

四分法司 千葉五郎平朝胤道

長三尺一寸三分
幅一尺九分
房幅九分

同添狀壹通

其文より尚古先祖千葉家存與の寔社たゞ依て是を收る所を記せ
して慶長十八年九月十五日四分法司正勝毅白とあり

梶原景秀書

石橋山合戦又分捕ひて書簡の通す見番より早ろり記一牛月
廿二日景秀未とあくちて若押をかげて直賈決一かじ

小田原北条家神領寄附狀 壱通

其文より須崎堤の白田合八十萬所
神領の由と記せ
延喜正勝毅白とあり

鷲ノ戊辰霜月十五日景秀とあくちて若押を書くの按より戊辰の
當社へ従古鎌倉右府將軍頼朝卿崇教尼子へ養和元年辛丑宮
社を經營のうへ小於てみ葉久常胤其頃當國の主たりふたり許多の
田園を寄附へ奉るを信を厚めしとすり然るに承禄小至北條
氏直老臣大道寺景秀小命へ先親の例よりせ神領寄附あり則
社前の水田是より

寶壽山長命寺 遍照院と号し天台宗東嶽山より属せり本堂
等身の釋迦牟尼佛坐像士の文殊普賢般若十六善神等の像を安す牛
鳴辨財天傳教大師の作也長命水 日一堂の後の方よりあるものもあ
椰樹ゆゑい君木の守斗生ちたれをねてぬまに植たるに樹下の碑文少しあれ
自在庵舊址 堂の右竹籬の中より能掛川水圓もよが室をひそめて住むところ今後
其地より芭蕉の句と號たら碑を建てあり

ひさづらひ雪見よらばのゆきとらゆき

不也

當寺昔のまゝの庵室あり。寛永年間

大樹御遊獵の跡ゆく所不豫

小あらせられ。此寺内より体をたすひ庭前の井の水を引て御薬を服
あり。小須臾ゆて常小あらせあり。此井より長命水の号を切り

寺の号をも改じてに肯

合年あり。尔来長命寺と稱す。

牛頭山弘福禪寺

牛御前宮の東より隣る此辺を須崎といふ。黄檗汎
の禅室ゆて洛陽萬福寺を摸そ奉尊の唐佛の釋迦牟尼佛右に迦葉

阿難あり。牛和尚延寶紀元癸丑創造す。每歲七月十五日大施餓鬼行有

佛殿

本堂の額

柱

根

揚

筆

紙

木犀

佛殿

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

左

右

佛

殿

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

天

王

殿

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

左

天

王

殿

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

左

天

王

殿

前

左

右

前

左

右

前

左

右

前

左

天

王

殿

前

左

右

前

左

右

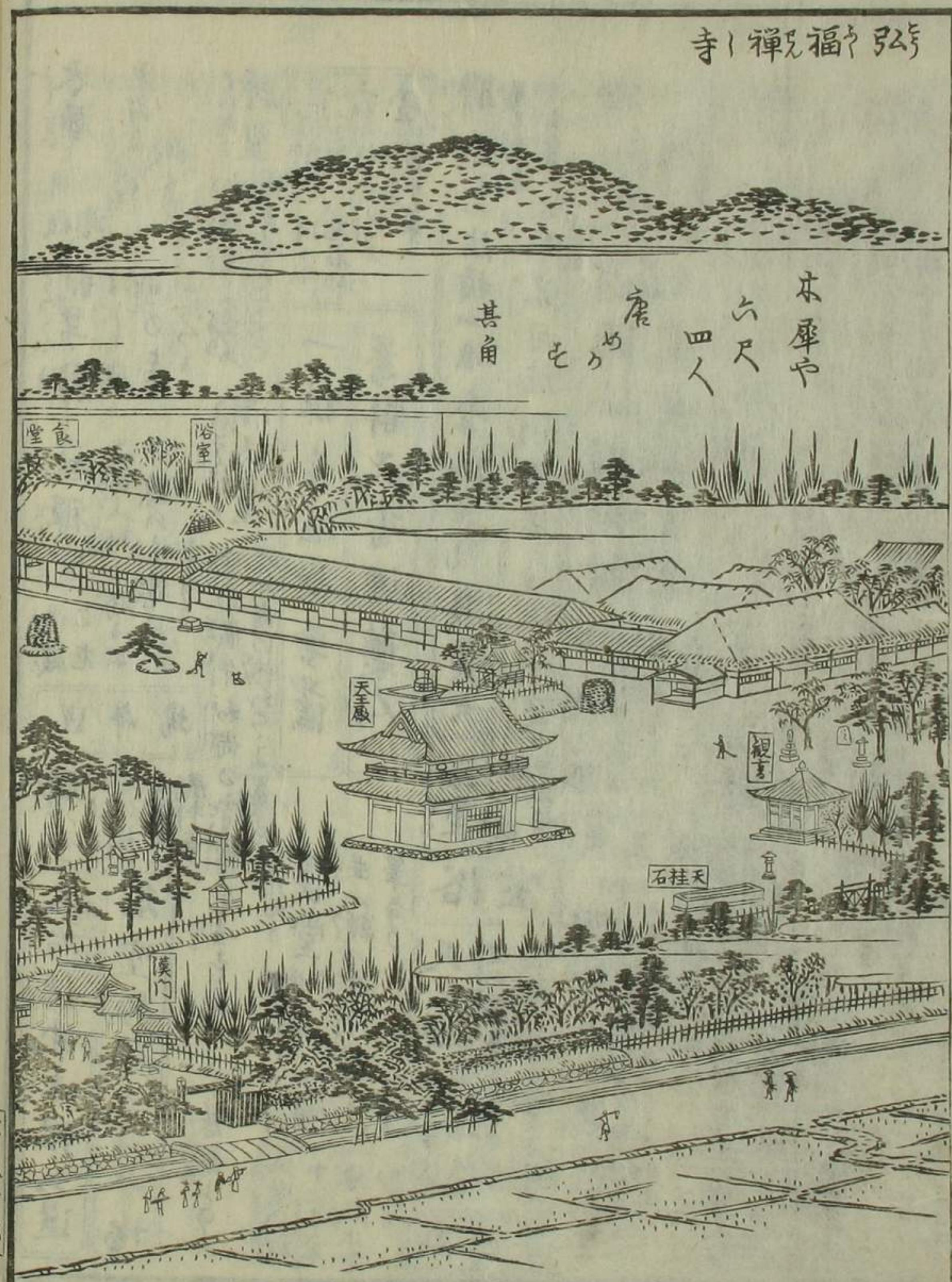
前

左

右

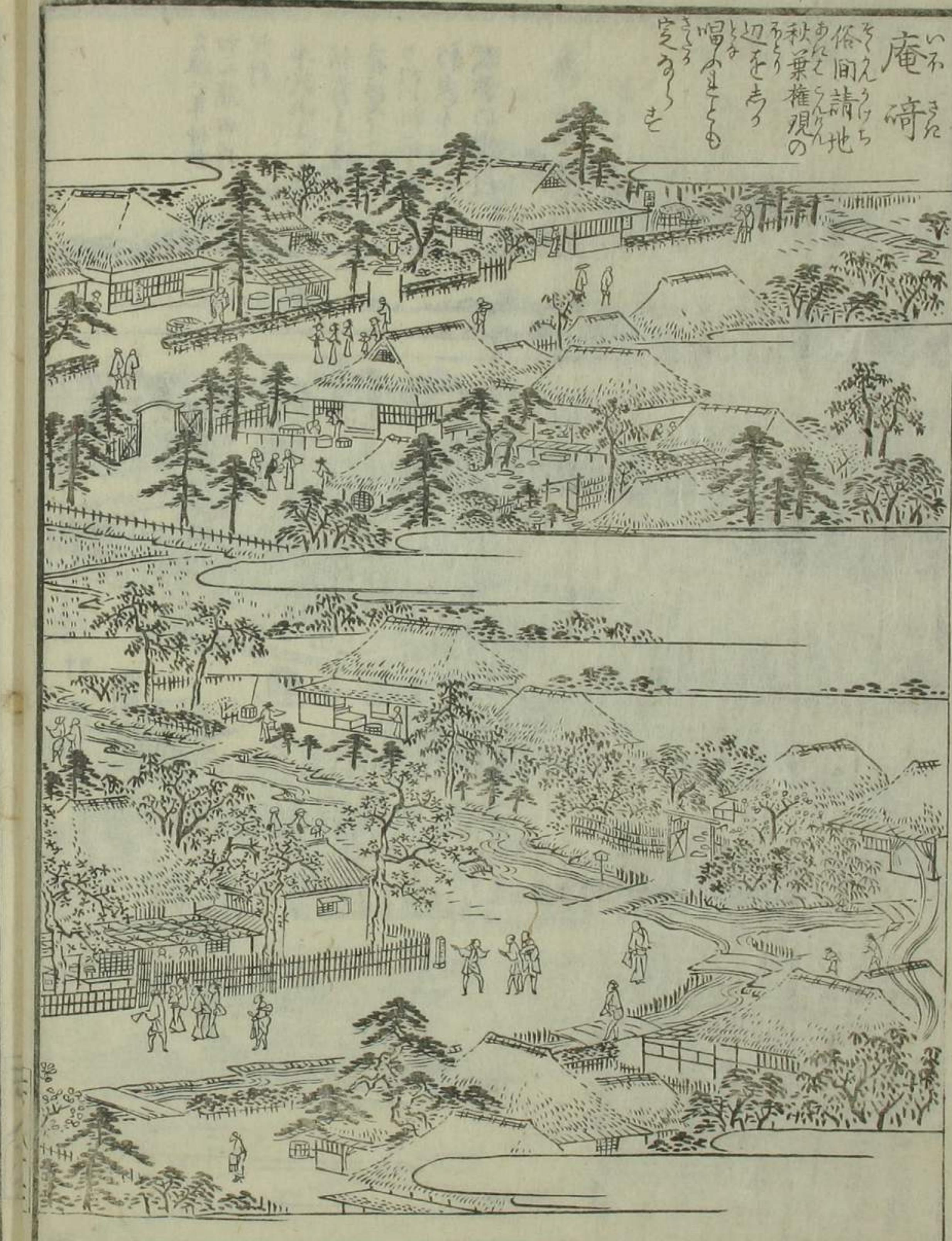
前

左





須湯らり
請地秋葉の間
近傍まとの間
酒内店多く
各簞をくま
鯉魚を畜
酒客多く
うに宴飲を
中も葛西
左市とらふ
葛西之年
清重のを商
ありと云はれ
とも是紙をあ
ひきやとりひ
ひきやとらす
計と云こうも
前ま飯うちと
まくとて唱へた
いの今ひむやと
うひく妻と影を
あく人されよ
ありぬ



庵崎
俗間請地
あんぞんげら
秋葉権現の
邊をあ
唱ふよとも
定めを

支貞凝歸宣寧賢牛銘師伊瑞牛頭山弘福禪寺大鐘銘並序
那亨書仁永守之護心施金爲造巨鐘以利幽顯寓書微余銘爲之
國五歲在庚申鎮禪母子有大法將整飭林官守曷殊天正
傳年勳斯用行所暮世主考擊守以利幽顯曰福曰壽守四海夫
臨濟正著禪一子孫振振以空爲口守密妻爲毫
歲在庚申在莫世主子孫振振以空爲口守密妻爲毫
宗世四世高泉激敬撰

漢門總門をり
額の門をり
御門をり
鐵牛の筆をり

牛山聯門
門柱上
筆者上

福地弘安院集
玄門高月堂法

秋葉大權現社 同所三丁あやう東の方請地村みあり
遠別秋葉權現を勧請し 稲荷の相殿とど
あらへうらへ或ひ云西應年間の勧請うりとも 別當ハ三寶もあらずて

千葉山滿願寺と号し神泉の松と称すり社前より松の控より
清泉涌出するをいふ諸の病み驗わりと云
境内休泉幽邃すて四時遊観の地あり门前酒肆食店多く名
生洲を構て鯉魚を蓄へ

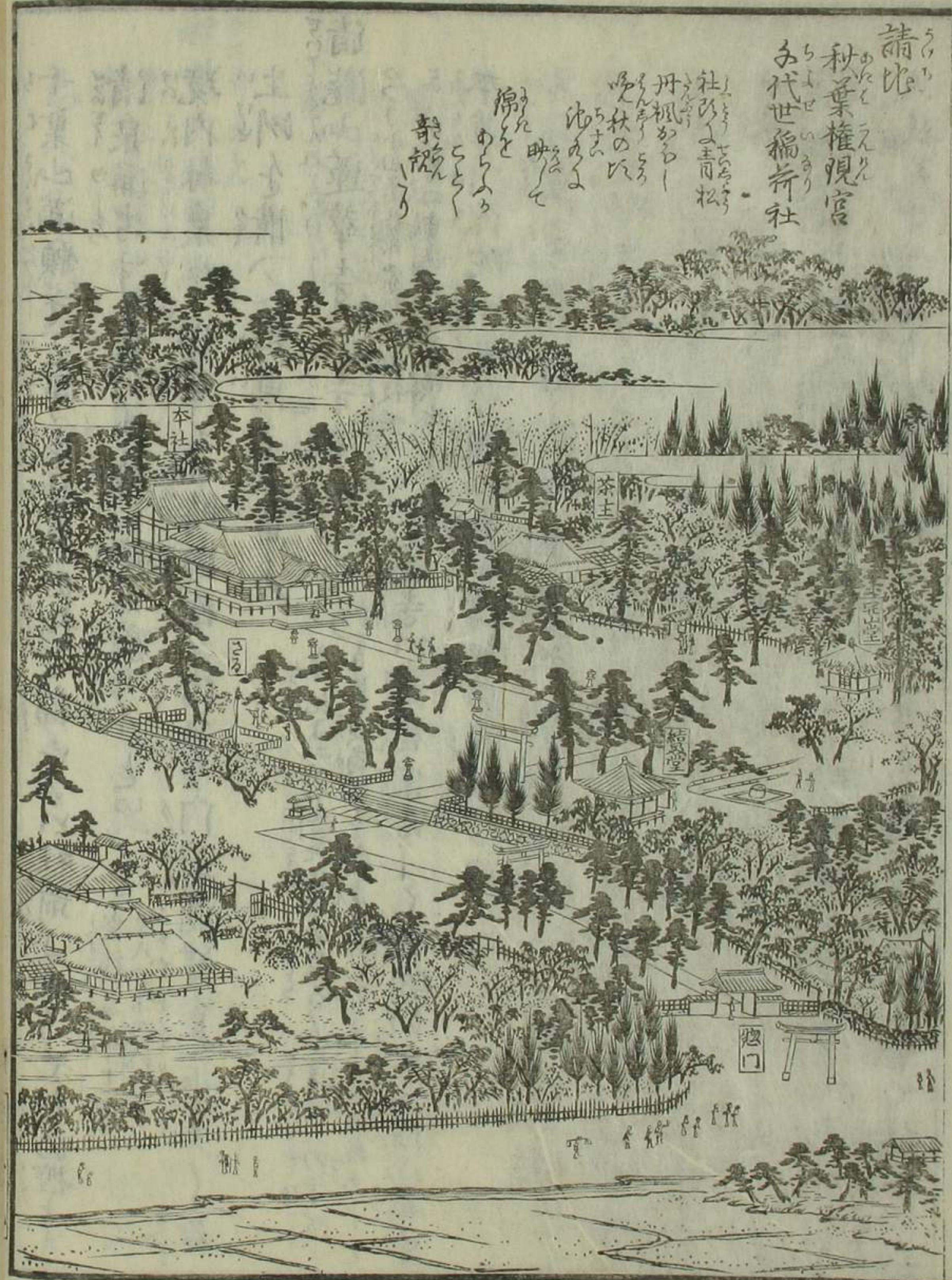
清瀧山蓮華寺

寺嶋村小あり

寺記云く昔此地の海原より後世御子御子

龜戸村吾嬬權現の社記云
寺頂尚記と創建あり故よる所の称あると
當社の權輿

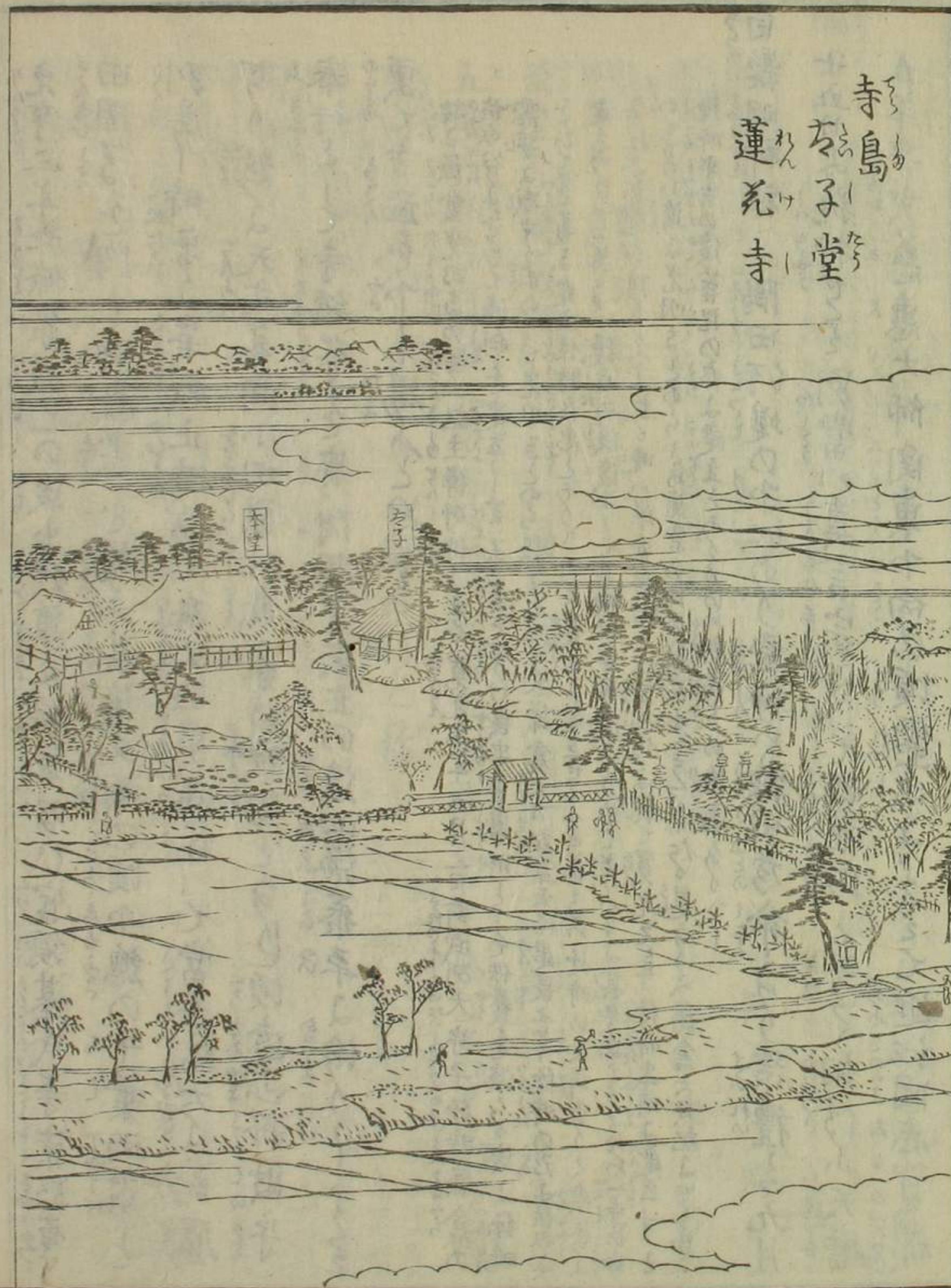
本尊阿弥陀如来の像は惠公僧都の作といふ
老子堂 卒堂の右より卒堂聖德老子の像は十六歳の真影にして
木子自彫造ありと云北条經時の念持佛として往古の相及鎌倉時代
同父よりを弘安二年の秋北条賴助寺院よりひよ卒堂其ノ
此比へ引稱し同年八月二日入佛供養を營し故今より近此日を
以て様日と云又是より先寛元二年の夏國中大疫疾流行し
人民死する者少くと経時頗る小是を歎れ卒堂より告て諸人の病



苦を消除せんとぞ懇よ祈願と或夜奉る徑時より靈爾而アノ秘簾
を揭ふ即此祕簾小よりて其頃病を退す命を全す者もく
からどとうり今す金アノ助アノ

件の祕簾をセテ

相傳ノ寛永四年丙午三月下旬北條經時疾よ臨む其時舍才時頼
を側へ招ひ示て云く我疾難治アリ元後又至らハ一宇の梵刹を創
建一年頃念より處の聖德ち子の像を安置すべしといひ號て同四月
朔日享亨年二十八歳小して逝まゆ
東照云寛永四年丙午四月一日今日入道ニ五位下行武藏守平朝臣經時奉と法名の安樂年三十三
とすへ一證依時頼遺命を奉りて鎌倉佐久谷より一字を開き蓮華寺
と号く此列安樂大禪定門と号ヒ即辦法印審範を以て定山と云
寺記又審範は
深井法眼範翁と云されと鎌倉のものと云ふと記ある良忠とめりとあくと將治と譯す又其後經時の子頼助此寺嶋を領せし
と離の志頻々と忽小刺髮一弘安三年の秋鎌倉の蓮華寺す代この
寺嶋自定山たり
佐く日大僧正頼助と号セテ初よ先よ審範と定山とすとある
たゞさへ諸宗系多よ延時の子よ頼助と号セテ載一傍よ体と本侍と主セテ疑ひに付け
とのべれと誤りうへてよ頼助のことをりふきん候ふとわんのを



寺島
ち子堂
蓮光寺

え亨二年北條家滅亡の後も徳尊氏將軍及び官領基氏等崇敬厚く
田園等を附し御教書を賜ふ其後文明の頃下總の千葉両領と
別立一時平手又早戦止時多く兵火の災屢々にて當寺も大より荒廢
せり始より天文年間小田原北條家の領地とすし頃遠山丹波守
奉行として寺領等を寄附せり天正の後四海泰平ニ治リ

更て寺産を以て祠物のとづき

按ふ廉倉光明の尼山記生禪師傳云く寛永元年五月二日前武列大守平治時廉倉の
佑父がよひて淨利を建立し甚しうと受け良忠を導師として供養を喰らう後より経時
靈夢ニ感する所ありて光明るとあらにひると云ふ又廉倉大日記云く建長二年経時の内才佐奴
をひて直義も建立住持良忠とあるこれと寛永云建立せり甚しうの時生前より又建長は
建長より直義の後時の後後すと某間七年を隔て依て考へる其号より一寺の如
されとも自ら別立へ一寺の時廉倉光明の尼山傳云載て寛永元年経時生前云建立すと
ありのの後光明とあらし廉倉の内の材木坐へうしなはれた是より又廉倉大日記云の如
経時卒去の後苦悶のみよ建主とありのい則高ちの權輿あり

白鬚明神社

隅田河堤の下にあり祭神の猿田彦命より祭禮

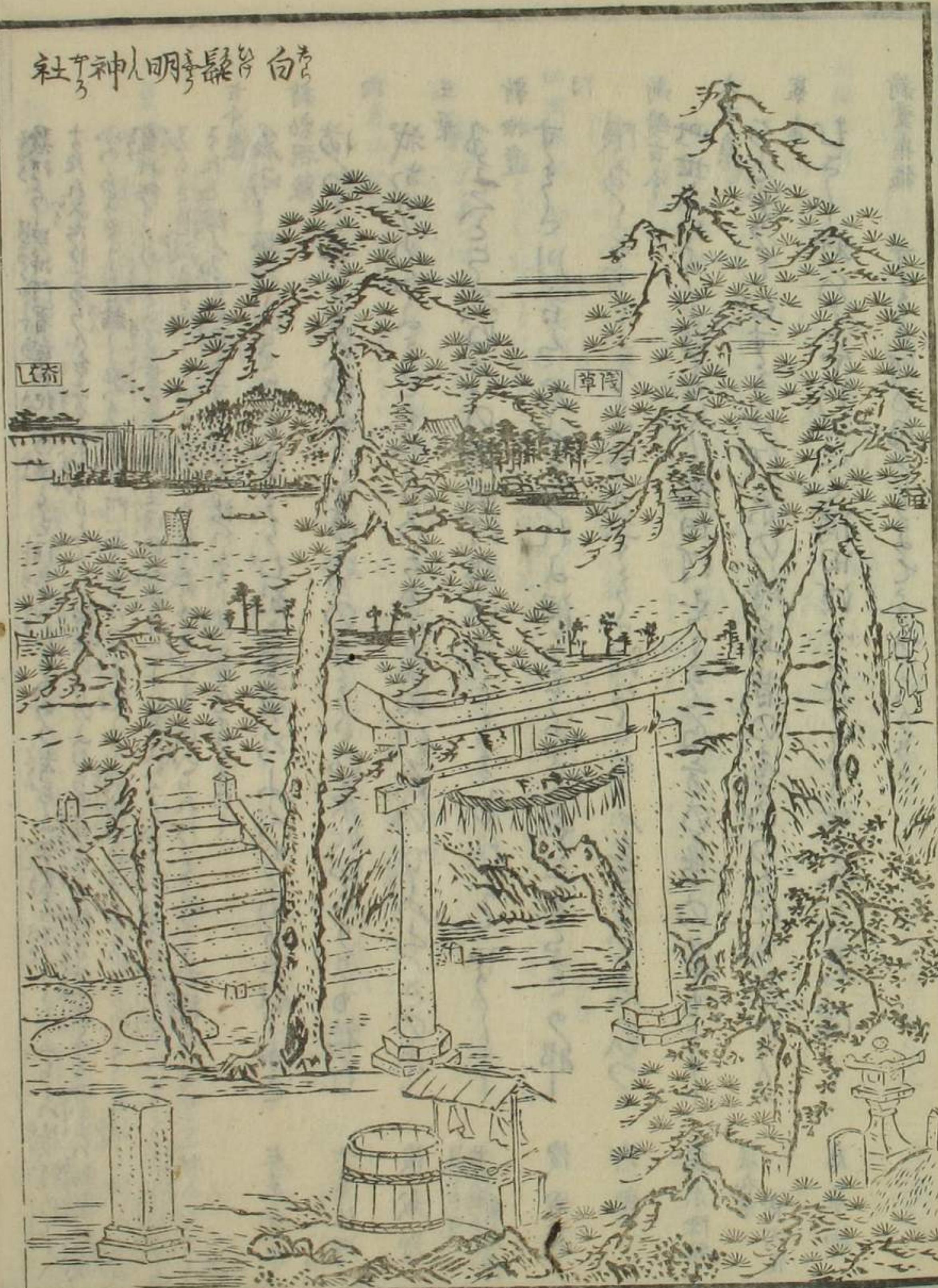
十九月

十五日巳狹行せり別當ハ真言宗ゆて西藏院と号く相傳ハ天曆

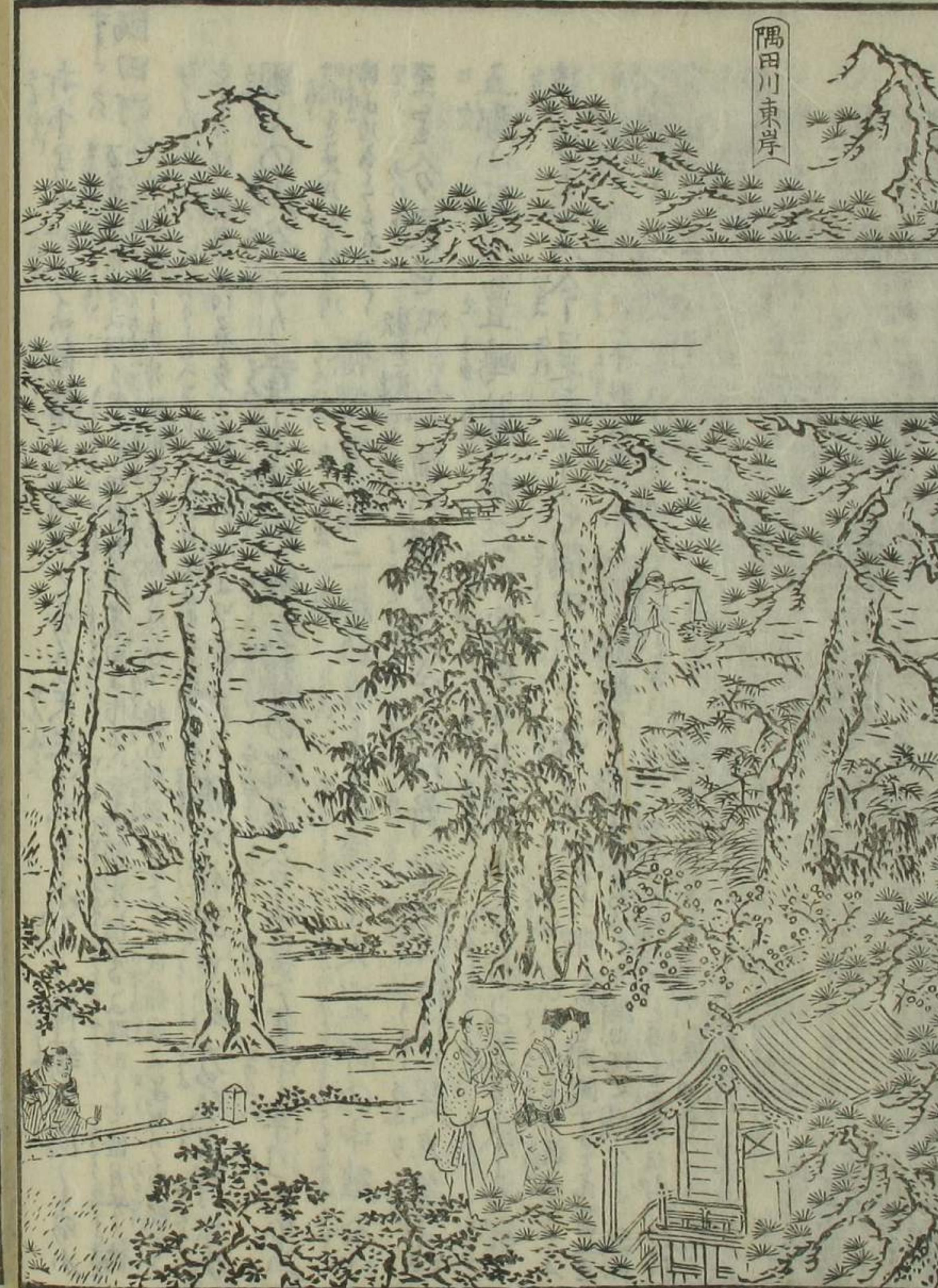
五年辛亥慈惠大師関東下向の頃靈示よどて近江國志賀郡

折下より此地より勧請一ノノとより天正十九年小至り神領を附しゆふ
隅田河夫本抄古今集井姓抄ゆ尚四をすひや徳の國鬼とて今之武藏國又属せり或說ア
ゆくすけとひとくと又さりての日記よりとぞ源の信例甲別乃ひ上野木の
國の山谷より武別秩父郡の諸流域合て是を中津川といふ
浦山川をより名つく標澤田舎ニ郡の界を東流し大里郡の中越谷小
至り分流を川とりて一流ハ横見比企入間新坐
五郡小耳り豊嶋葛飾の兩郡の中を流れて千住より末り浅
草川といふ今是をより隅田河と稱し以上事立人の傳不の説云ふ
ヨリ或人云隅田河直千股又流乃今中川と標澤川とみ間ニ模たりて古利根川と唱ふるあり源田
河の北の方より其間へいたれど今之御れと水流とすれども土入らずに隅田河と宇里老云もく
而と流みて今之御草川と流れて源田河と並び古利根川と一定
ヨリヨリのうりと古利根川とある標澤田舎の角田河とあり源田河の御草川と謂ふる也
ヨリゆく云あれとも武義と相模の境の御草川と之が在五中川の御草川と謂ふる也
被ふ菅原孝標の更科の記より武義と相模の中よりてゆくと川と之が在五中川の御草川と謂ふる也
とふとくと古利根川とある御草川の御草川とあり源田河の御草川と謂ふる也
ヨリゆく云あれとも武義と相模の境の御草川と之が在五中川の御草川と謂ふる也
被ふ菅原孝標の記より武義と相模の中よりてゆくと川と之が在五中川の御草川と謂ふる也
とふとくと古利根川とある御草川の御草川とあり源田河の御草川と謂ふる也

白音
山明神社



隅田川東岸



發河と笑沖門署梨の圓とを同弟大和よりもめう考るよ矣基
すなれ入たじあらんをし方葉集りとくに勅撰の體
小わらまくを論へゆア笑沖門署梨の代述記より隅田川の事と
書かれたるの中より葉集の中全14の和歌四十八首より草葉集の
歌りさし放りスヘとゆリかねまく葉の集のまにべられらるをも私撰する事と推知シヘ
されと論ふを要とするにあらばれまく其意をあくるのみ

卷四

卷之三

11
新井北菴
あつらアタマ紙書きを考へるのすゝみ酒糸にひくりの物

俊城御

玉葉
みのとくわんぬ月の隅田河原のほとりあひをせ

後二院
權大納言
典內侍

すゞ川吉くらべタうれよ洞をくわづみとくわづの卯
良か手をひきめにあまの身の毛をそひへ

俊城御

新續古今
此世よりアリトモトモ 開田町ともいふ方の鳥の名めう

卷之三

夫木集
ことゆきすゝ河系の時鳥昔のよのあくにあくひ

後九条
内大臣

むさし野の木下に出て隠田河を渡り

すとひしてよすく行鳥の名すむとそりりと
とく

四
卷之二

北岡記行
きららたのうちめ鳥城の翁穢 陽田
さきえひゆあひぬふる
ト總西家へもくちよはり利根八向の二河落め
ちにまくわいのうまくはく出村の西のうまくはく流村の水面
悠々とくく西家へひくく晚香曲江よ流日帰枕行草を走りと
むゆ荒波蓑笠のあよあくり葛土石巻の西よあくて絶頂もくく
宿居すよ夕日を帶勝月室よかと扁雲行つゝて四域よ山す

卷之三

武家辞記行
嘗とあくめきをのむれかゝ鰐を食ありましゆ
サクシテアキメキヲムルレカカハヤマツクシテ
サクシテアキメキヲムルレカカハヤマツクシテ

水經注

東園記行 角田町のえんえんのよ處の松。指めりとへり実とあわせ

宋
妝

追討の大ねとくを左瀬門佐平直方右兵衛佐中原成道等の朝探り
應一ニ萬三千余騎より發向と忠常其身の千葉の城より楯鎧舍才
陸奥權政忠頼を大ねとく其勢二萬余騎を率ひてすまへうとの
南より陣を取同十五日官軍城道の舍才伊勢攻城俊直方の子
息阿多見四郎聖範共よ勢を合せ先登一方よ戰ひ故よ先陣の
太頼放走をされと忠常も残兵一萬五千余騎より駆ちられ官軍の
後陣よりあす直方も本道の勢の落あつよ推進りとんあらむと引
返り放軍の兵卒を隼んとく陽田河原より陣を取と云

東鑑曰治承四年庚子十月二日辛巳武衛相乘
于常胤廣常等之舟楫濟太井隅田西河精兵及三郎清童等
萬餘騎赴武藏國豊嶋權牛清光葛三四郎清童等
最前奏上又足立右馬允遠元兼日依受命爲御迎
參向云云

北條九代記小文治五年七月十九日頼朝を奥別恭衡追伐の首途
あかと云条や千葉の常胤八田右衛門尉知家は東海道の大ねと
川の溪より渡り遙下畠

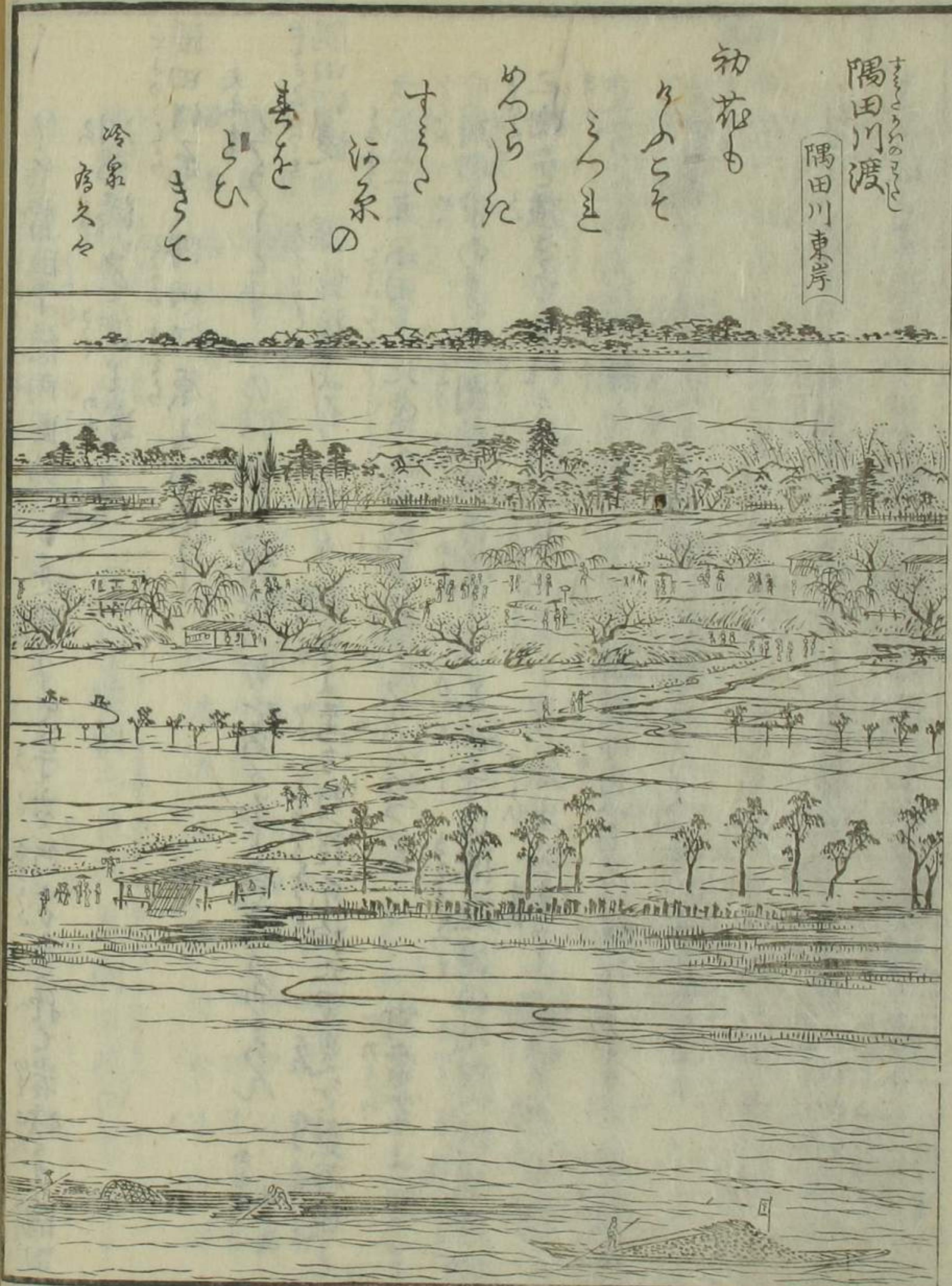
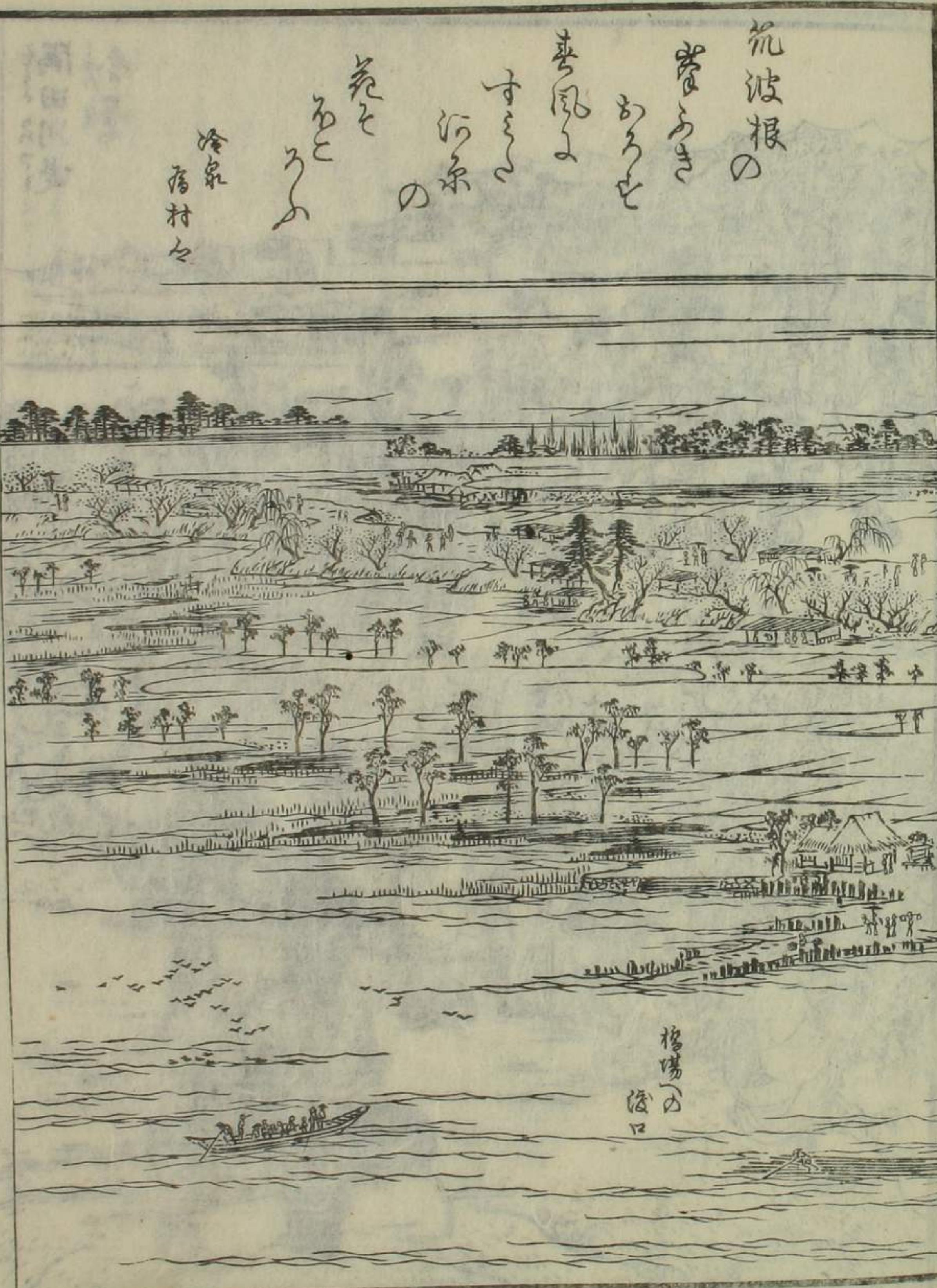
湏田河原 閘田河原より

夫木集

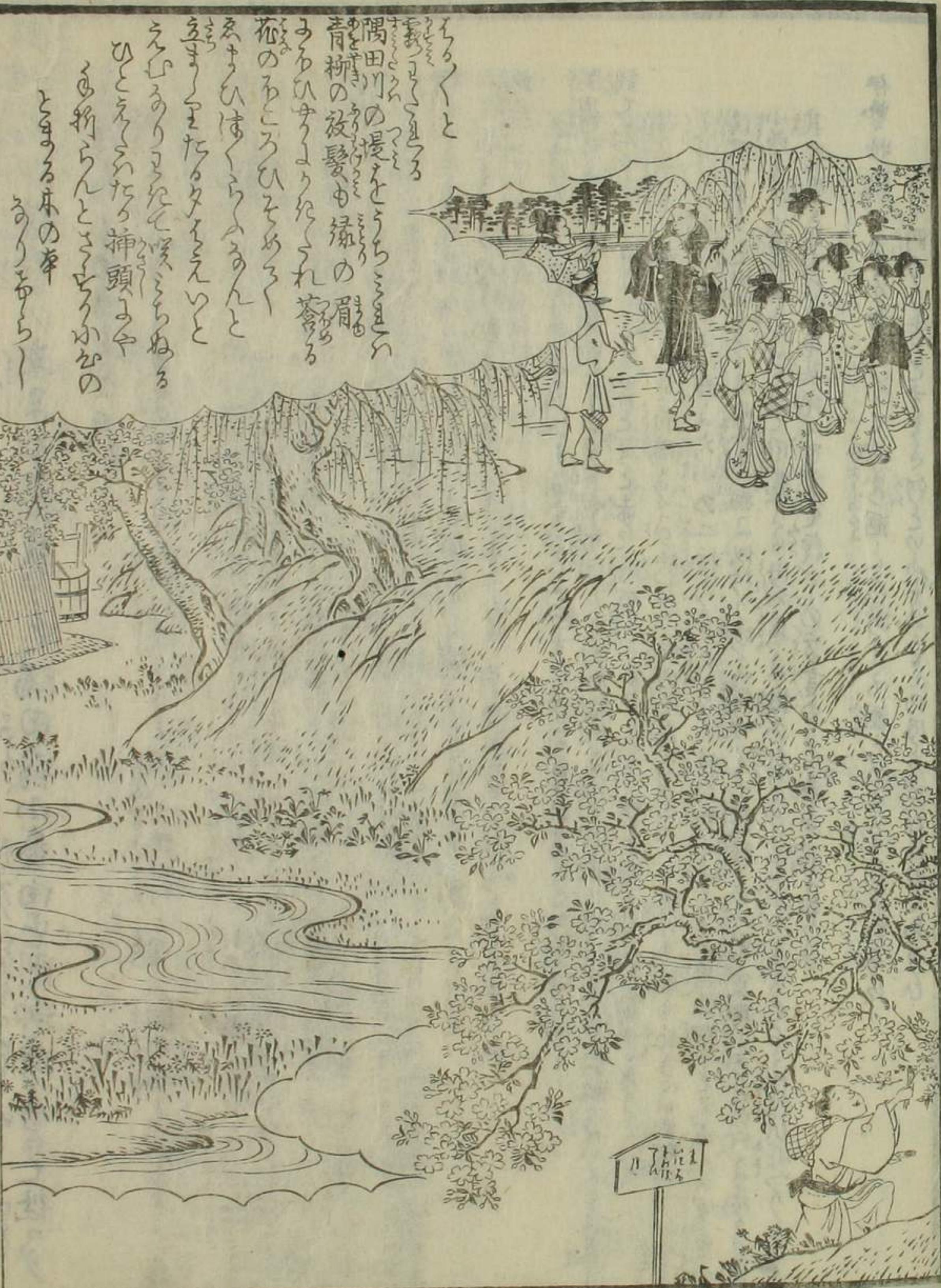
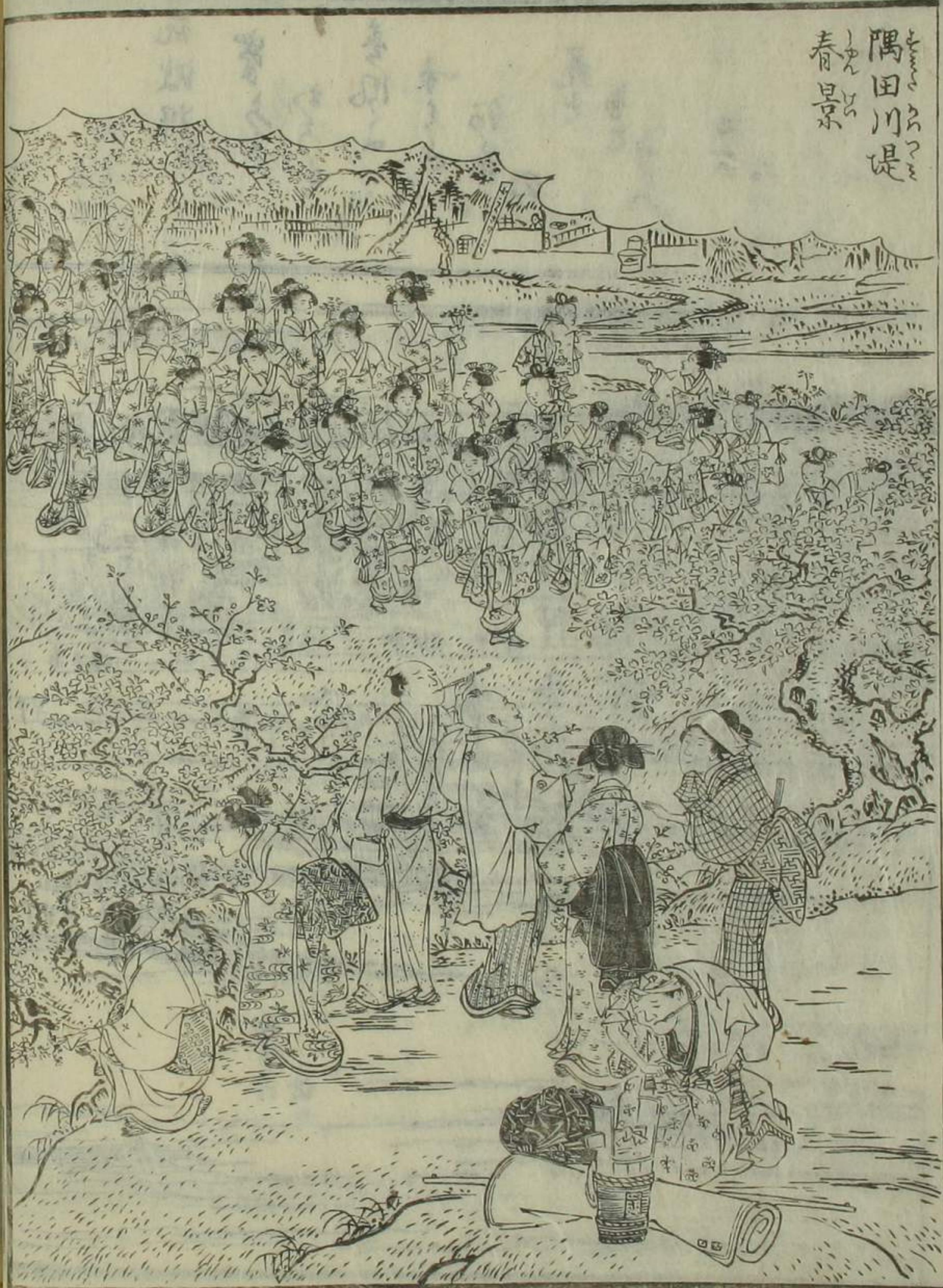
西三位
李衡

とすこのいふを鉛行のかたるわとく游ぶあるらん
閘田河堤 深堀傍より浦り然谷より至る行徑凡拾六里豐と鰐谷堤と
云天正二年小田原北条氏これを築たりといふ
御當家よりこそ
官府の命よりて三圍縞荷の邊より本母寺の隙地堤の左右に桃楊柳の
二樹を植させられりれハ二月の末より孫生の末子を紅紫翠白枝を
交へされやら錦鏹を晒す如く幽艶賞するに堪たるゝと堇菜碎
芥菜盛りの頃へ比上よ花籠を敷す如く一時の壯觀たり
閘田宿 行れのゆとりゆ今あるへからと往古の奥別街道の驛舎
あるへ東艦より治承四年庚子十月二日頼朝を左井閘田の両河を渡ら
きとの事に今日武衛の御乳母故八田武者宗綱り息女

小山下野大掾
政室妻



隅田川堤
春景



とくと
隅田川の堤をうらみ見る
青柳の後髪も緑の眉
みるひすよくなれ蒼る
花のわこうひそめ
えすひはくらふんと
えすまたらタえいと
えすあらこをせらむ
ひとえあたら押頭すや
も新らんとさぞかかの
とまつる木の草
ありあらー

寒いの尼
と号く
鐘愛の末子を相具」と
隅田宿小糸向と則御前よろて往す
を詠らしめりと云

都鳥

伊勢物語

みうりあた所代よあひきるすへ行すくらうのうとだうすは
隅田河のえととくを賞愛せしるす今相日又丙辰記行よびあひ角田河のうのあれ好みの人とてあよ
飼てくらをえよまことよ嘴と口とあひ略の大さきとらのう蛤とねみてくら食りうと云云
按よみちの鴨の名うて向鴨あるゆ決せり羽の灰色あるもれと脊も股も向きよ両羽のつにサト
玉毛の多々或人云此ゆよ大小の二種ゆ大さくの鴨の如く小さくの鴨の如くと又或人云寛東の
海傍ゆゑて形大なるりの其声猫と似たり故よ俗呼んて浪猫といふ則食料とをうの行はせりうの
小鳴り常の浪よあひて風荒る時も邊よはの鄰うるを求めあひてくらよ浪ひ遊うとそ
其余不くにわれとも其也よあひて程くのうが言ひて名を異よせり

名前をあてておらぬかと人へありやれりと

田園雜記

幽雜記 やくで隅田川のわたりよひとて 中畠
野ゆゑにて川上よひとて
もと都鳥原もとタカミヒロ内侍もとすみ

道與准后

と欣状の其

山陽

のりとてゆゑを 開田院と号む天

卷之三

東嶽山小属を本尊の五智如来より中より阿彌陀如来の像の聖徳
を子の作と云傳へ貞元年間忠圓阿闍梨當寺を草創し 天正
合令ゆ依て 極く昔の極善寺と呼んでを慶長十二年近御園向信尹又武秀
極善寺と影と 四より是をひ一時隅田河逍遙のゆゑて小當寺へ立よりせられ寺号を改

御遊獵の刀當寺を御建立ありて新殿造りと造せぬひぬ
按又本冊ハ梅の分字あるらんされと梅ハ毎よハひ母よめうと母
止賀と訓て西齋詩話又幸得翁山信嘗二日本茶と作す山辨圓する梅尾の茶を賞美
せうう梅の中無するあき文字よりれり梅の譜をよやみとひりひもくそや
ト又武城集又云く凍山の傍雪村譜ハ友梅と云一う梅尾よさうてらの山の名ハ我譜の文字
ううく云是も頗接ともうれに秋雨雅又梅ハ梅尾うりとまく史記又江南梅梓を歎とあるも
梅の名うて母と母と字あひ頗似られ母を譜うて母よ作うりのあらん哉れとも本冊を
りうて梅とすろみ又松石ゆく因てたよ舉く
増續音府とうう書よ夷堅志をもじて云く

釋路來濤曰自山路上曰木公木母如何壽曰木
公方儀歲木母松也正舍木母梅也稱旨除中書云
木母寺緣起の跡より湖海新圖を引て梅を本母とするを摹して湖海新圖より支上の夷堅
志の意より又青木氏より著せる草廬雜錄より此を載へり古今集の文よ
雪うれい木魚に花を喰ふりうらを梅と見えてあらま
紀友則

千載集
崇徳院御制
老の歌へ吹きす風のうづく音より本海より梅とちりひるぐれ
續古今集
年の内をもとめし音を本海のむとみそ春をほとまわくが嘆
將家

ゆ連ねくも梅とり丈まを
ひうちちり一秀包み
ひめこさきの
梅若丸塚
木母寺の境内より塚上よ小祠ゆ
梅若丸の靈を祀る
れいも

山王権現と云ふ 権現の化けたりと云
柳の枝て今若木 例年二月十五日忌日たり故より大よ仏事行あり此日都下の
を強そへたる 貴賤羣衆と來せり

田園雜記 やくすくの邊よりてまくあらそを披講すと
よの塚の邊あむれさ今のこうにあらえて
古塚のゆけやくわのすく河きくつまうともゆく袖
中頃一条戻り自康道を國東へ向のこう此地よ

木母寺
水神宮
着塚
梅

八幡

着宮

水神

隅田川東岸



あそぞれの柳の下の風濱の隅田河をす

うたふとやひをや古塚又都のゆくとすり川風の音

此處の木がすにあするかの絵冊の和あより名書

山体住人とあり

あそよと柳の下の古塚

此處の曼珠院宮室東へ下向ひて時此地に移ひて頃の事

此處の真讀の絵冊今後本此處に移り名書族人との事

此處の御神又祈紙ありて後儲られりて此處の事

縁起云梅若丸は洛陽北向川吉田少将惟房卿の子なり

此處の御神又祈紙ありて後儲られりて此處の事

此處の御神又祈紙ありて後儲られりて此處の事

此處の御神又祈紙ありて後儲られりて此處の事

此處の御神又祈紙ありて後儲られりて此處の事

此處の御神又祈紙ありて後儲られりて此處の事

此處の御神又祈紙ありて後儲られりて此處の事

此處の御神又祈紙ありて後儲られりて此處の事

廉道公

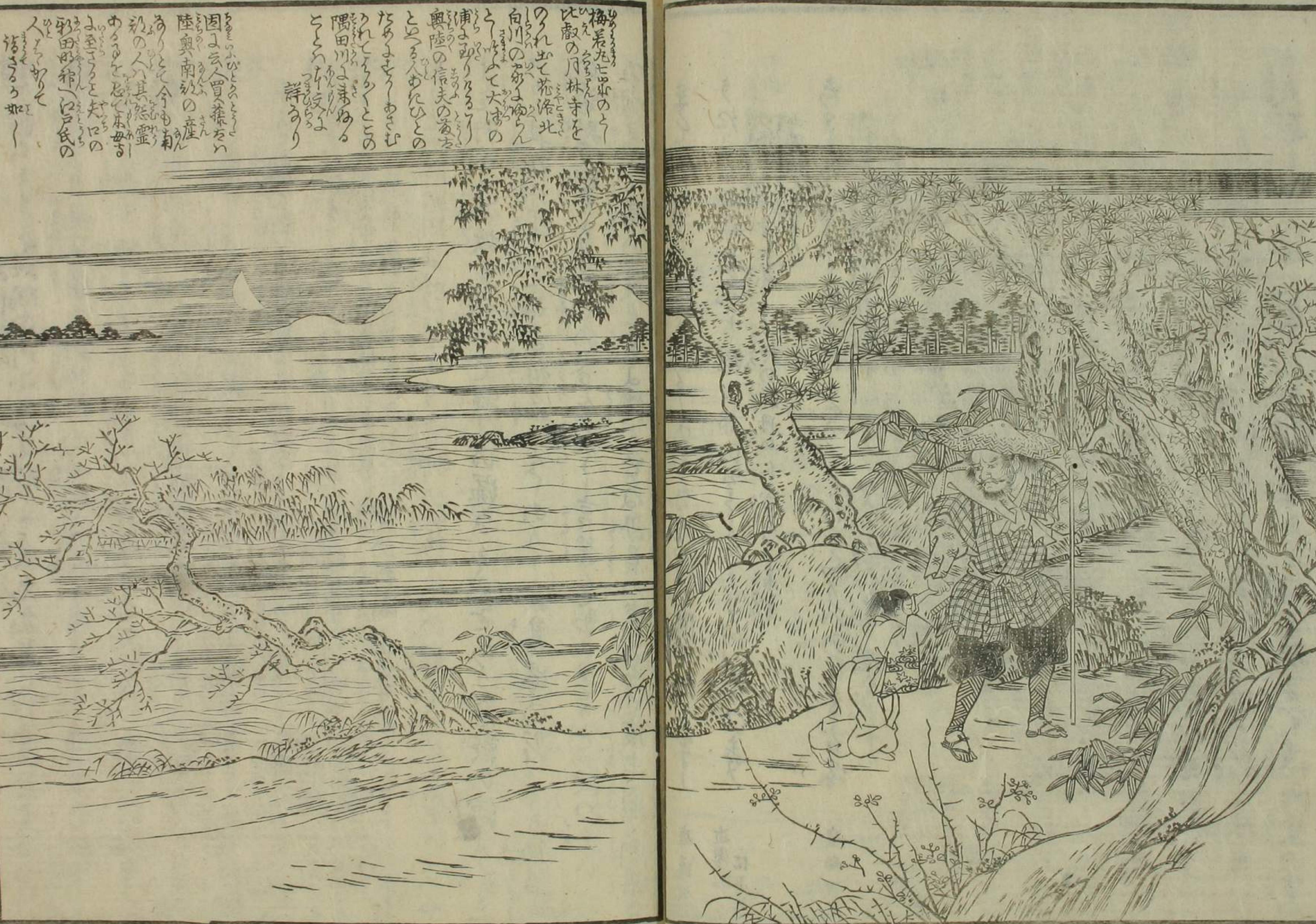
近海

信尹公

同縁起又惟房卿

嗣子を憂ひ日

月



此隅田川小至る時より貞元元年丙子二月十五日より
路の程より病より罹り此日捨小此地より旅て廻りてゆきよしの際より
和氣と稱せし事きとぞもこなよ都鳥すゑ河原の鳥と消ぬと
此時崩圓羽黒の山より總坊忠圓阿闍梨とを貴き至りありける
適うに會へ土人と共よ謀りて児の亡骸を一堆の塚ア荒野に桺
一株を植ひ印とモ翌年余の餘生十五日里人集りて佛名を称へ
児の死れをとぞもひ仰りたる其日梅若丸の母君後嵯峨院の御宇北嶺
美濃國野上の長者の花房後嵯峨院の御宇北嶺起ふ花房前とを
さよりとあり或云花房とも後羅髮とめ龜尾と児の行脚を守候らから物犯犯
號六巻御茅原の帝也とあらせらへと此隅田川より青桺の蔭よ人の群居て称名せらをや
しと舟人よ其故を向て我子の塚あるをちり悲歎の聲よ見
りり其夜の里人と共よ称名ゆくわみ其塚のかけより梅若丸
の姿髪方髪ゆきわと幻の容を況へ言葉をやもととての夢の夜よ
の明易く曙の霞と共よ消えゆる母君の夜あゆて後忠圓阿闍梨よ
常行念佛の道場とすて児の亡跡をそ吊ひある

要を摘

以上本母寺縁起の

又謡曲楊川とひゆもられよ便りう其畠をよ云後朱雀院の御宇長曆年中荒紫深よ樹よとひゆ
美す年ゆりしう人商人よ勾引され常陸國職教神社傍神官寺よとひゆ其せり
到り岸花廻漫とうて藍あよ漂よさきをえど此水中に落すありと流るゝ花をしづくひむけゐたつとも
れりれり里人等其故を向ひりい合する事あれりとて彼狂女を神宮寺へはひ行権あるよ遼セナヒトヒ
うれしものゆきつゝ物くさひへ忽タヨリとよふく一撫そく久した母子の対面ともよ後ゆせ死ゆヒ位傍りと
すう慈悲深くりりんへ直さま橘子よ眠をとらせ田子ともよすくくされりりけり東國残記
按よ猪若丸の事蹟ハ先よ挙たる如く秋夜長物語又ひ謡曲の楊川等よ付相似

又同書曰
河邊有柳
樹蓋吉田之子梅若丸墓所也其母北白
人云云
此遠謡曲の隅田川より本母寺縁起の意よ相傳
書つて右陽と云圓雑記ハ文治十八年の記行つて寛政の今より凡三百十余年を隔たる
昔より其頃さへ右陽と唱へたりしより其は説のまゝならぬもとす
内川 本母寺の後の方の小川をいふ或人の説よ往古荒川後瀬川み投よ
流りう時の古址すと云フ

孤高の山を北の方の生れをうへて作松の木立ゆゑ
頗美景なり
丹頂池 同所堤の下より池の中よ小島を築く往古
命にようて

此比の中嶋に丹頂の鶴を放ち飼ひありとす
庵崎 本母寺の北の方とも又い請比村秋葉権現の辺よりとも云々^{モテマツリ}
澄月が枕又武藏國より加くま本妙蘆院草等^{モテマツリ}より下總國より入だり同
名駿河よりも又紫の一木^{モテマツリ}と云ふ冊子^{モテマツリ}小袖村の出海を有し候と云ふゆ
是も既きらと云々又同書より昔本所の地へ海にて倒嶋殊小夥^{モテマツリ}と云々^{モテマツリ}
あり一故又五百箇より作り一といふ舊れとも未考

家ためのひとひもをうねる傍の隅田河原にあやからず
建保名所百首

今宵やゝ誰高からんひよきたのすゑいふるの秋の月歎

順徳院

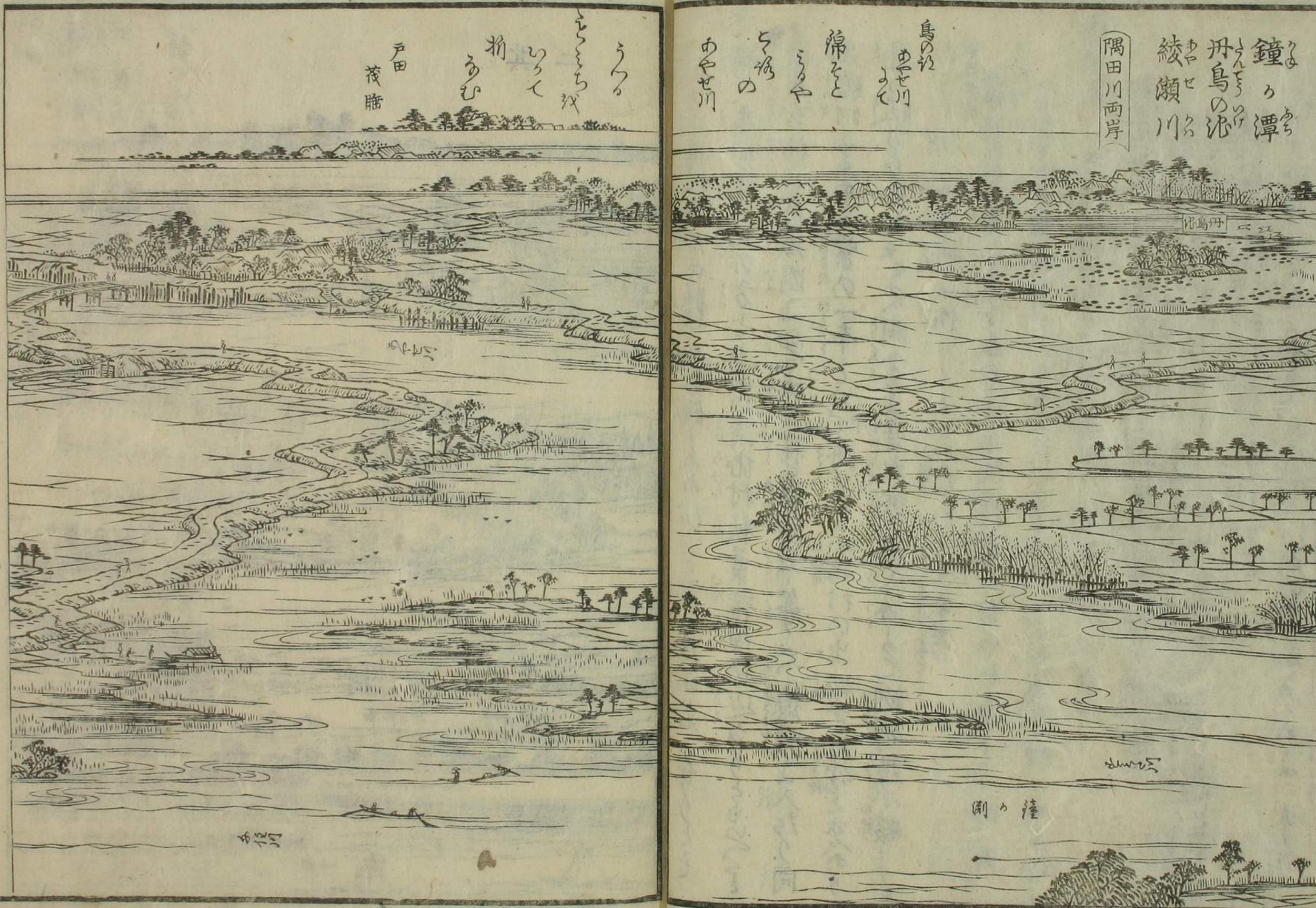
園屋里 牛田の辺をり、澄月、お枕より武者聞よ入らる

彦宿のすゑ、河原に因ひて、はくね室屋の里よ高やからほ

この頃はあれ集より、康ええ年九月鹿鳴の社よりそりて隅田川のほとりへ此渡の
上の船よ河の傍よつたまく里のゆきをさうひれり、室屋の里とまうとがよひ海舟もありて泊
たりと云云

型復院の宮室東門下向の時此地よ逍遙一あひて

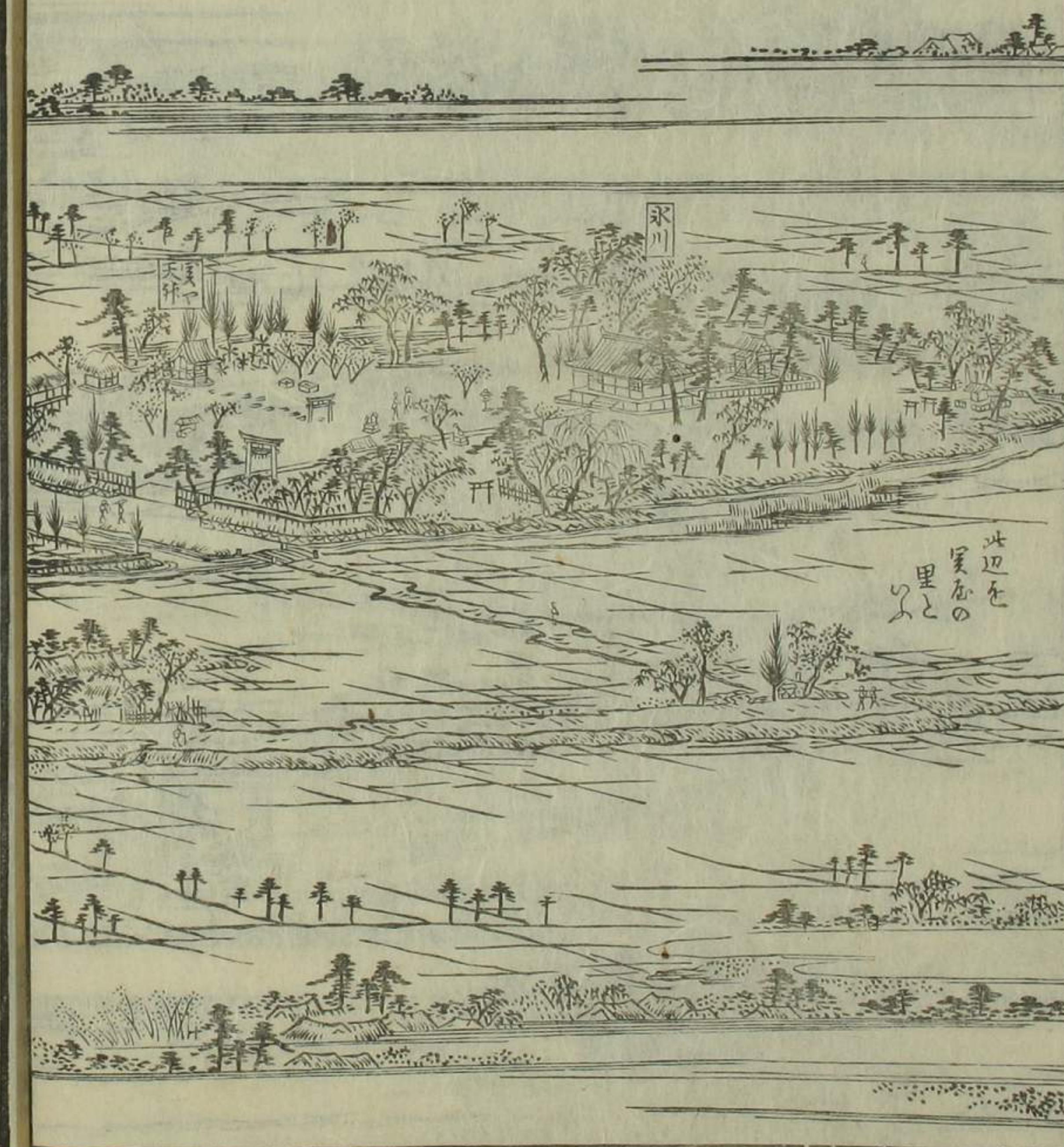
わるさの道よ室屋の里もわれみ隅田川原のあくぬあくめよ 道見親王





其三

天滿宮
荒屋



鐘
潭

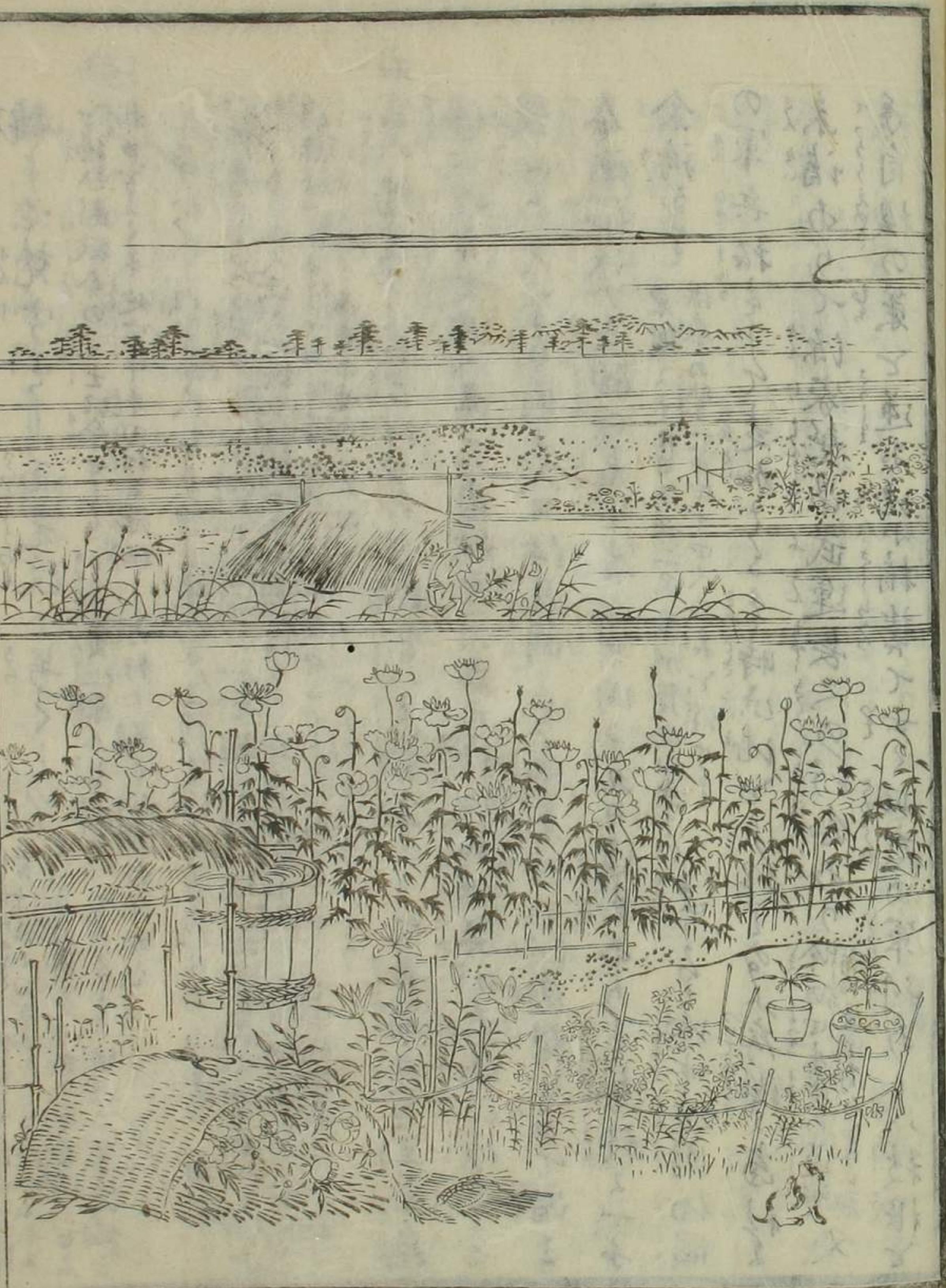
同所隅田河荒川綾瀬川の二保の石をさへて名はく
木葉殿とある不領の中ノ石足立ニ保と
傳へ云昔普門院といふ寺の鯨鐘此潭又
沈没せりとも又橋場長昌寺の鐘もともいひ今両寺又存する石の
新鑄の鐘の沼よりも此のと載たる何れ是あらん

按此傳う御と名づる也同川之岩淵の五徳巖と云ふもの也と云ひ往昔普門院ノ隅田河
之傍の傳中より一とえ和二年位持家真地をトシテ今之の龜戸村ノ鷺せり
甚頃あまつゝ其聲を五中又投もと土俗傳う橋場法源寺の鐘とするもの也

牛田藥師堂

本母寺より二四丁北の方牛田村よりも真言宗よりて木葉
山西光院と号く徳治二年丁未當國の領主木葉氏の草創岡山を
覲音法印との本尊留傳鴻光明來の弘法大师の作すと云ふ葉常
胤崇尊の靈像ありと云傳へて靈驗著し
相傳の木葉氏常胤の事を裔又同五郎胤朝との事有り下總國香取
郡石出と云ふ地より居住し石出日向守と唱へ此牛田村へ胤朝の業の地あり承和
隱栖其末流修雪入道吉深より至て此牛田村より遙に竟莊園の地を

葛西の辺人家の庭
園あらは園畦ふも
悪くに季の草花を
裁並えりうるあるよ
芳香たま馥都うり
大人園林の時とて
浴ておれと別取
大江戸の市街
花石ふ牛と
鬻子りつも
影



轉て梵え字ト西光院と号くとシ

吉川姓小田系小室家より上山後赤也
通家の名よりして食糧三百石

と揚ひあ獄令の官士に命せしも生貨二席ニシテ大かトてりとシテ國朝の宗族好之
私をシカとシカを延宝中牛田村よ隠栖ヒカルト号く和ハアリ云く

子たシタねオノ、ありシ宋の戸と間もゆりり花もありあり

常好

菴宮八幡宮

菴宮村シナムラがあり別當べつとうハ高言宗タカヒコジンアリて善福寺と号す社

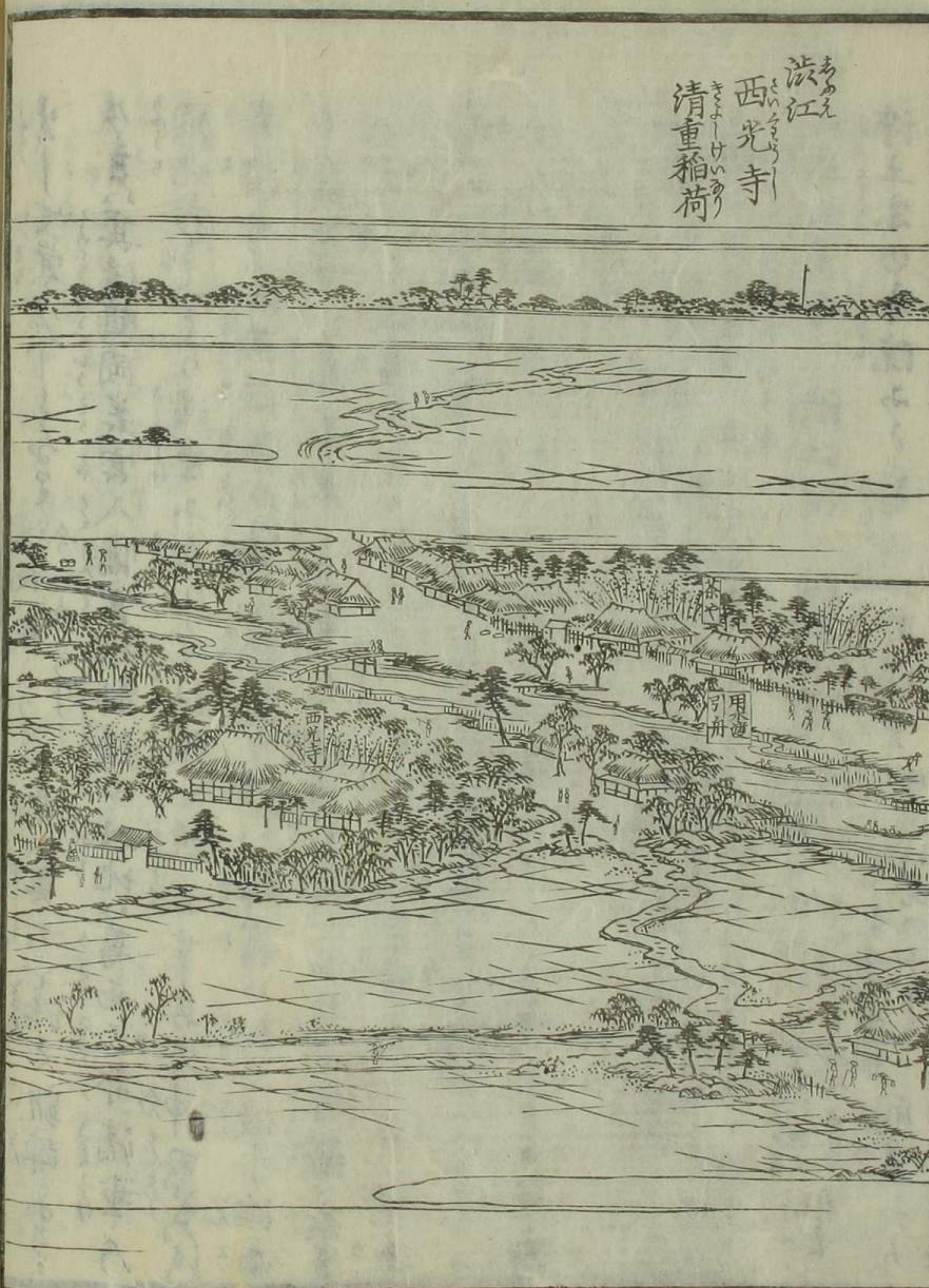
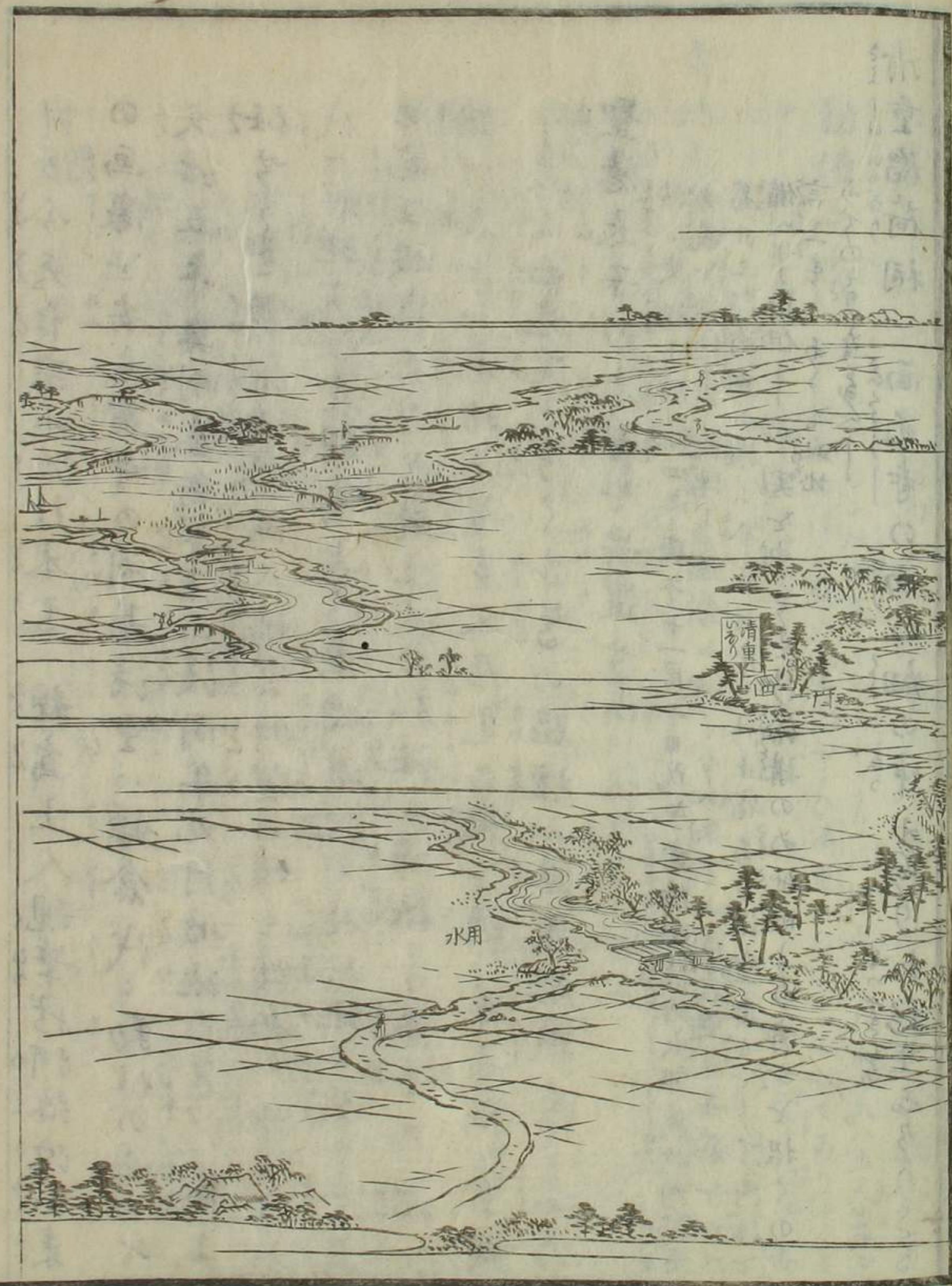
傳云姓古文治シナムラ年己酉秋七月右大將賴朝卿奥川泰衡征伐シナムラとて
發向ハシマリありシタ同十八日伊豆國いづくにト専光坊の阿闍梨アチャリとて潜ヒシタ
泰衡征伐シナムラの立願スルモトの旨シテと告らシテ同十九日途出ハシマリあり勢彌ヒミヨ一子
余カタ崎カタシマ供奉ヒサツの紫シシ一百四十人の名メイと往ハシマリせし
の軍兵クルマニ拓ハシマリて走ハシマリかシタるを時ハシマリ地ハシマリとし紅葉ハシマリの序ハシマリ潛ヒシタよ南ハシマリ神ハシマリ
矣ハシマリ詣ハシマリりて源家繁昌武運長久ハシマリの念ハシマリありシタ
手自復ハシマリの策ハシマリと遂ハシマリ小地ハシマリ小指誓ハシマリて云く此度ハシマリの軍利ハシマリあシタハ枝根ハシマリ

生シタて暁シタ少シタ人シタとシタがシタ其シタ頃シタ小林シタうりとシタ竟シタふ奥シタ川シタと活シタケ陣シタある
乃シタ其シタ後シタ鶴岡菴宮八幡宮と勸請ハシマリ此シタ地ハシマリ葛西三郎シタ清重シタ乃
頗シタ然シタたシタふシタり清重シタふ命シタとシタ社頭シタと經營ハシマリせシタ又シタ神田等シタ絵
寄附ハシマリせシタる其シタ後シタ年代遠シタく隔ハシマリまシタれシタ瘴霧ハシマリハ軒ハシマリと侵ハシマリ淫雨ハシマリ
神指ハシマリて破壊ハシマリみシタりシタと天正ハシマリの後ハシマリ台命ハシマリふシタりシタ伊奈ハシマリ
備前守再興ハシマリありシタ重福シタ朱シタの玉籬光シタと彰シタアシタくふう
夫シタも又シタ昔シタとシタり今シタハ古松老杉橋シタとシタ寥シタ々シタる社頭シタ

超越山西光寺

法華經一部一卷

其丈漸シタく守シタもうりあシタて卷シタとシタ圍シタうふ指渡シタ一八九分
甚シタ古シタありシタ寺僧シタの説シタと賴朝シタの事シタめりとりひつシタ筆者ハ文覺シタアリと
淨土宗の寺院シタ葛西二郎シタ清重シタ權シタ頭シタ清光シタの子シタ開基シタたり



一う今天台宗ふ改む本多ハ親鸞上人親筆也阿弥陀如來の画像と安モ當寺の開基清重ハ鎌倉代々勤仕の士みて文治五年奥州泰衡平治の後同年九月彼地のまほ藏ふ任せき實朝卿鶴岡八幡宮拜賀の頃も隨兵小加くゆ人代々此地又住モ親鸞上人東圓遊化の時此地より至モ清重の宅より投宿あり是時上人の弘法より歸依し弟子乃禮と儲け名と西光坊と号を又居宅の地と轉じて寺院と営建

聖德太子の木像と安置せり

按東鑑法義と征伐して勧請も同様四年庚子十一月十日戊午常陸佐竹太郎義政同冠者葛西三郎清重小堀山今夜彼宅より清重妻女と清重彫造の為他所より青女と招くの由

清重縊荷祠

西光寺の西の畠の中より松杉生焉り

古叢少て此所ハ葛西三郎清重の墳墓の地とし今縊荷子勸請も同様一年の供養此塚崩れて土中より石碑ゆれ止れ主入蓋と仰り是時碑の中より丈三尺五寸あまりの弥陀の木像ありと號ひ其の裏は梵字蓮花也清重の名も附てありと

丈子八分あまりの座像あり今西光寺より除武具のたゞひも生りといふ。

青砥左衛門尉藤岡第宅舊跡

按永祿二年小田原北条家の所領役帳小遠山丹波守所領の内より葛西青戸の号と注せり今割く二村と西青戸表青戸と唱ふ

御殿跡とを称を今猶四方五六拾歩の所除地にて老杉矯々

たる中より小祠あり此村農人の中より廓の誰陣屋の何某あと

字小唱すありて皆其時世より呼來きるとのべり

按此ノ比添九代記より太平記等の書ふ青砥左衛門ハ伊豆國の住人太陽

十郎近郷の後裔かと云ふ事也

藤岡ハ藤満の妾腹小生れて赤子なりと云ふ事もと青砥註上総國分院

上総國分院の亂より伊豆郡白井のた中村國香と云ふ人のあるを一房總志料とし書ふ

赤戸と唱へ来るも既に藤岡と称する地かと現然と殊

てあれ此は是れかと云ふ事と持傳へ賞まへきの小もわ

古製山葵擦此地の農民淺見考より是と持傳へ賞まへきの小もわ

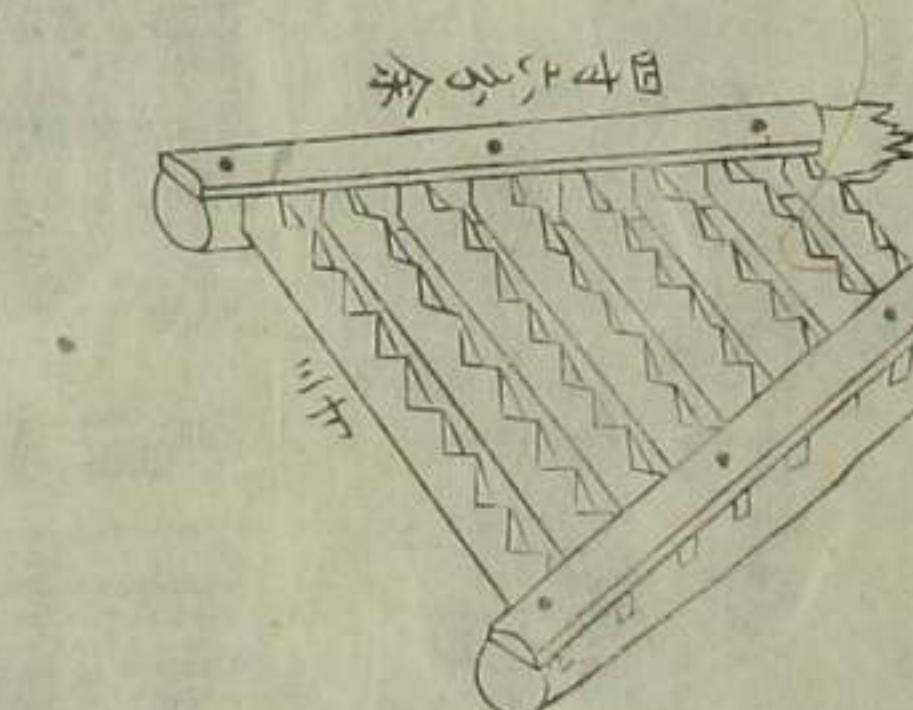
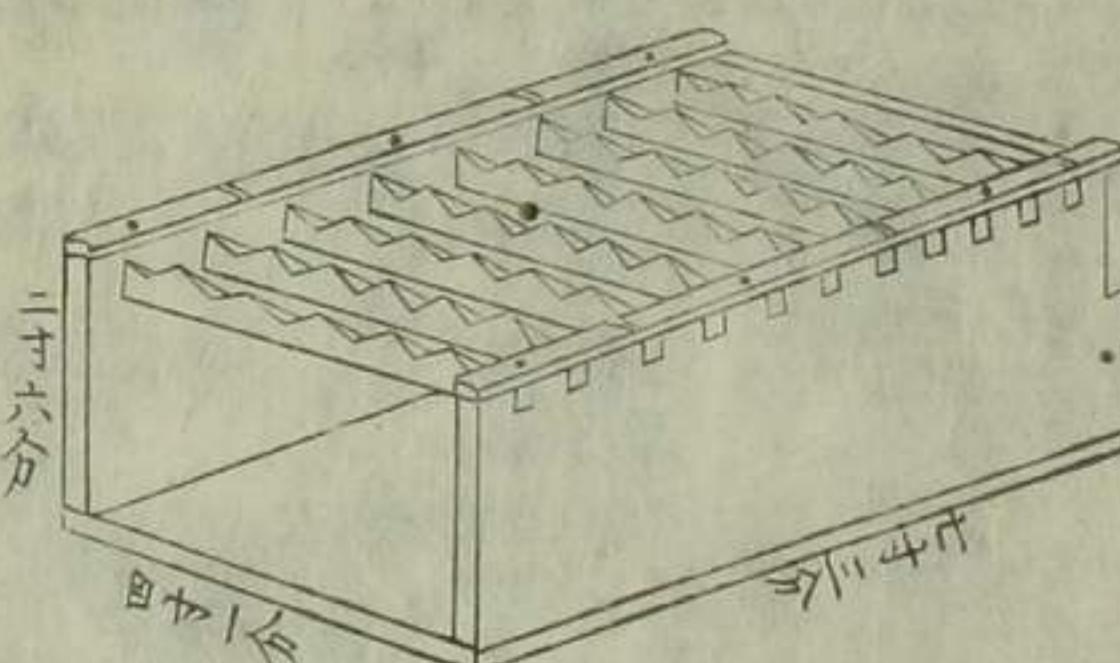
とたず上古質朴の風俗と想像をもつて傳へ

挙るの玉人此器と青砥と云ふ者と云ひれども其可否ハ論多々
だす今も陸川辺の農家是と用ひるものあり其図左のと

全形圖のとく

製を竹の厚きと鋸の歯乃

とくかて夫と横の板へ切る
縁と打付で動かすやうゆ
紋あると俗にわきひいろと
又下よりはもと裏大方
同様りて形もとく異なり
菖蒲草よかのあとき
物たり或人の説り



此所朽損シ
全カラス

木下川藥師堂

木下川村もあり土人キ子歌と唱ふ或ハ年少とし又龜毛川より

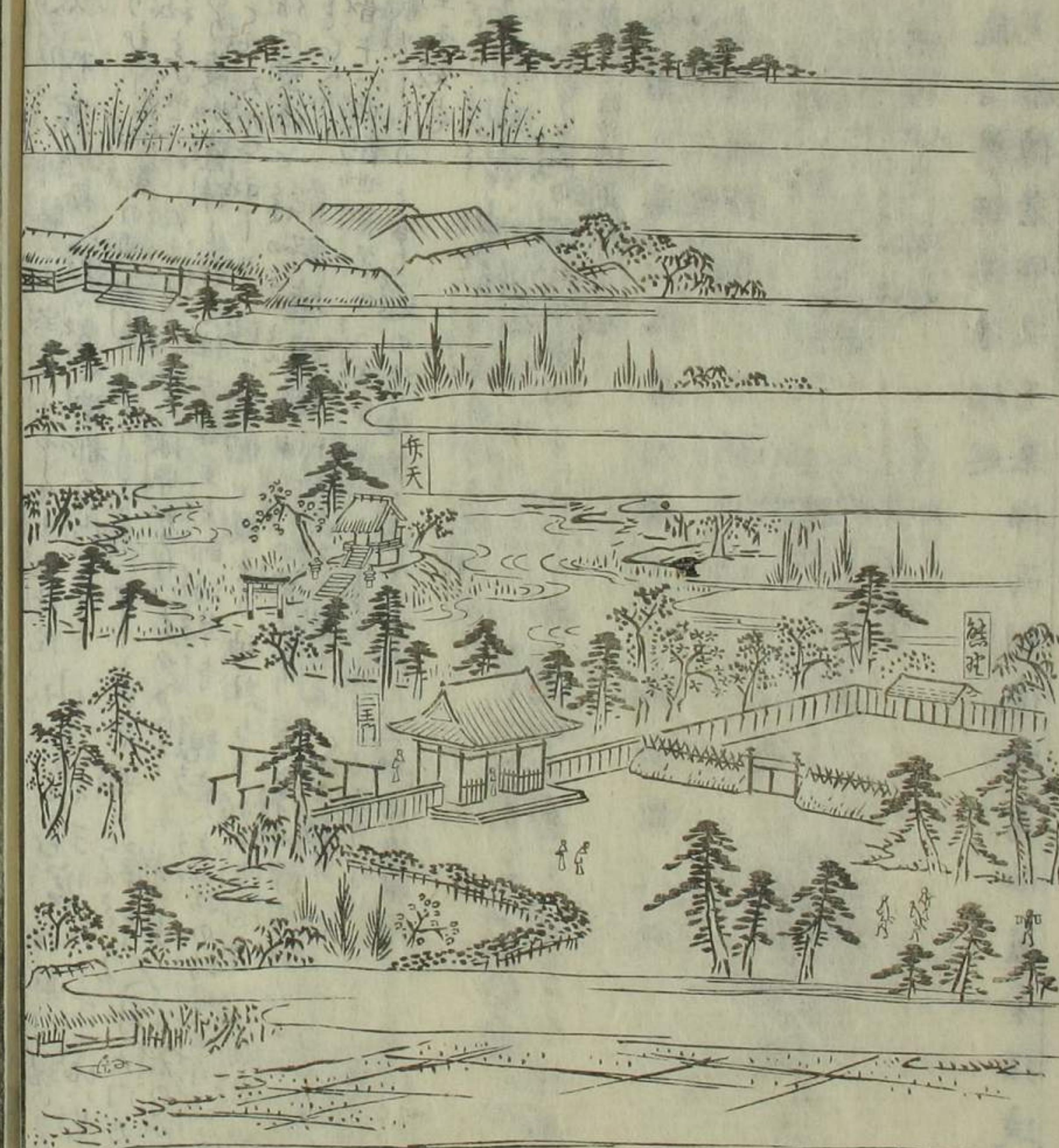
作る小田原北条家の所領役帳より朝倉平次郎

あり文字木毛川ふ作る

青龍山淨光寺藥王院と号す天台宗

傳教大師の作昭土日月十二神將の像ハ惠心僧都乃

木下川水や川師堂



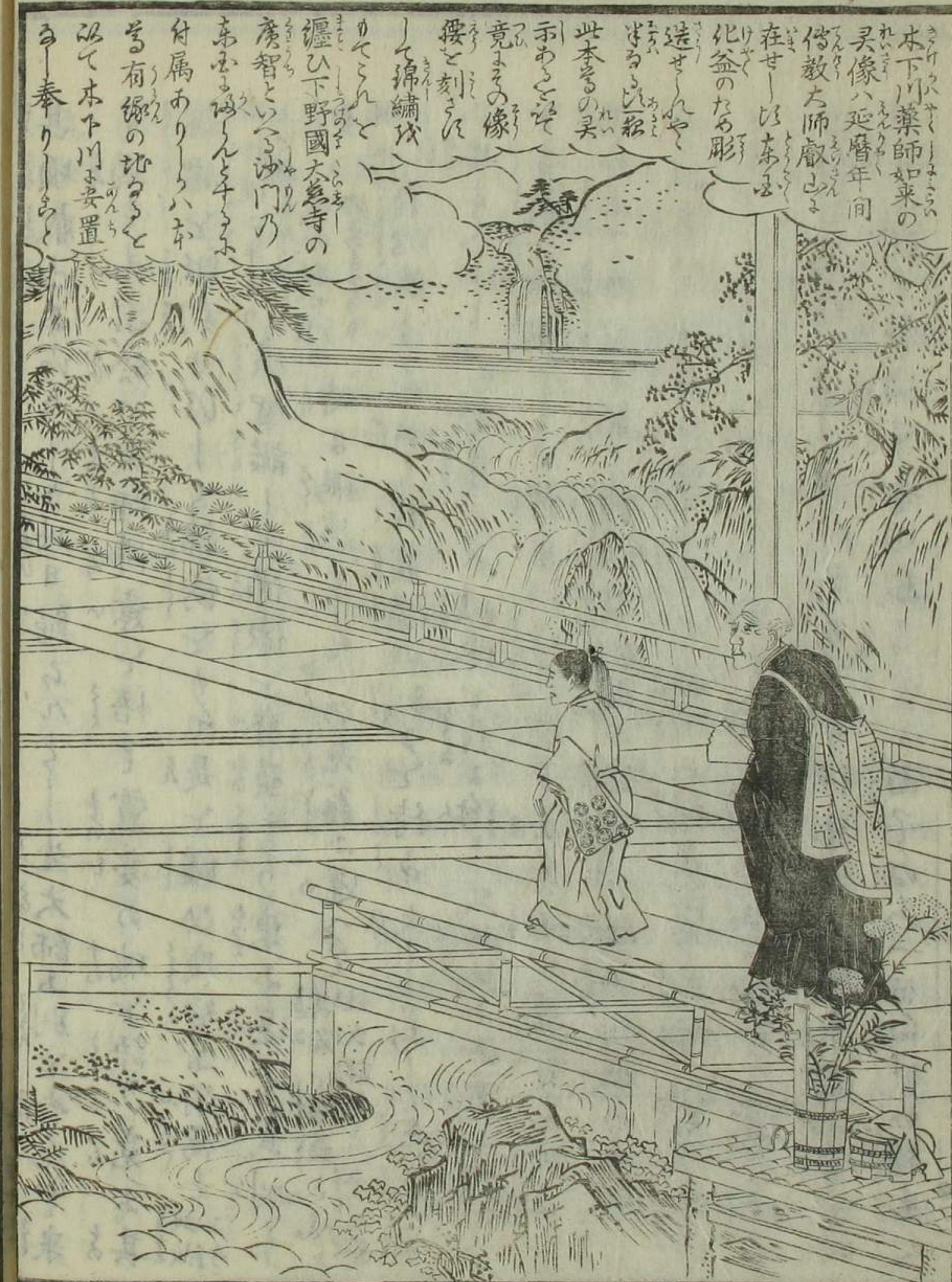
當不時官知語等力等曰宿山龍雲尋出靈留傳去識果汝息思
寺動放吏識唱言營獻今草以不能告青臨像淺被村必汝等而建
居院光及來翁是之供夜庵青動加青龍東彼草現里來等若還伽
既之覺富而之我此耳夢漸龍垂護龍到北像寺益道此暫能爾藍
而像大民建更之地覺或至至頭之日庵忽傳一者俗營合至後如
告是師等寺曰願伐大人清今而莫吾所然教日多目練心心翁何
村也恩傾於翁也木師告旦時聞令有拜起大有矣送若護歸語答
入此必財此聖師交告曰里時言不一佛瑞師自其天吾此請村曰
曰時靈戮聖者能荆村貴人有已祥言像雲所髮後際若此必民時
堂覺材力語也企新人入數龍龍自神而青造翁慈追遲地有日緣
字大自于不翁造為日寓輩燈形今龍青龍也來覺共歸亦感過未
未師刻時虛欲營靈我草捧奇隱以聞龍現言曰大深傳好應日熟
成或不庵師去我場欲庵珍瑞覺神之猶雲已東師信吾建也吾汝
雖時動中其告等則建子膳者大龍吾現中形北東誓語練我已且
然在明有人衆誓不寺等而其師為欲在覺隱有方首語若有得還
吾淺王尺也曰努亦於盍至此為護建覺大慈靈行自畢後西安去
志草像餘於後力空此餉問謂吉伽寺大師覺地化是凌時州靈於
在寺今靈此時村乎汝焉其乎微藍於師潛大吾之靈空有之像是
弘或堂木台有人村等故其即神此向出師安時感而善行自智
通時山時郡善亦人合我對夜名青神瑞寺便置暫溢西知未今止

紛無則附居謂翁髮是東靈何智是天像大我像之故尊乘佛無布
亂人下之處此曰白何還應處而日明腰師當告日再是止像量金
奇家總耶所翁我如常到之耶語欲此見曰行曰佛刻也觀者之祇
香唯國於以容待雪唱武地大夢還時今像也如像藥其院傳生園
薰有郡是然儀像容佛州也師事野下不已大汝已師後自教也始
郁一今乎者心者眼名偶汝對智州野拜靈師所成佛大刻大肆焉
智草之翁我非久塵居然夫曰感告國像異俄念但像師等師下爾
喜庵地與奉常矣素在逢隨信喜別大腰不覺我未今思身所總來
而于也智特人汝而葛一佛知而耳慈者煩時欲琢青念藥造國佛
附時四及佛故所氣飾老意佛問大寺蓋復四利彫龍彫師也葛像
像此望從像對負象郡翁廣意曰師有由彫更益像山刻佛初飾仰
於地瞻者者曰佛超木其智非然默釋之乃也東腰之一像延郡藍
翁震眺東正願像凡下名曰凡則然廣也止便國其本佛安曆青徧
而動唯入是我當相川唱諾所生而智而因起之夜尊像置七龍滿
智紫見荒生欲安見野翁謹測身知者大之拜衆大是當之年山三
間雲茂原身一我欣年不隨只佛佛來師自像生師也化今於淨千
日降草行佛見草然可知佛東也意在不以感明夢大益中叡光之
我垂曠數也老庵傾九其意州不附叡知錦歎且所師東堂山寺界
此瑞野里豈翁智慰十姓因自知於山便綉恭有刻彫國之創藥利
地花曾至輕之思唱鬚字負有安廣至到纏敬便佛刻以本一師益

嘉叙二十都廷地重菩色境視造至顯子所
脣紀院二自聞殷罪薩見奔道營貞空慶期
淨二時名神刻其重有聖赤起俗畢觀之寬未
光寺夏世淨也脇應誠友或見所一如年場我不
延脣年間傳教大師東國化益の為叡山於
六十月懼寺表及田得教全色有人志月其此久
其實十數見使不穠數積焉本昌山停
世日本鎮大神畝種到者或佛目觀並遂汝日
敢護願將永々懺問見像冥十釋歸勵當
綴國置遙充不悔其小高直二迦去志去
其家十獻寺同或本佛出視庚堂自營他
實之二佛供不燒末像見忽寅弥此構日
以道之前焉可頭為或者然年陀寬堂為再
告場衆今其備煉一見不明寬堂盡鎮護
來也徒之後錄指生大同淨出講心護耳
哲而合二源乎刺來佛或近佛堂於之又

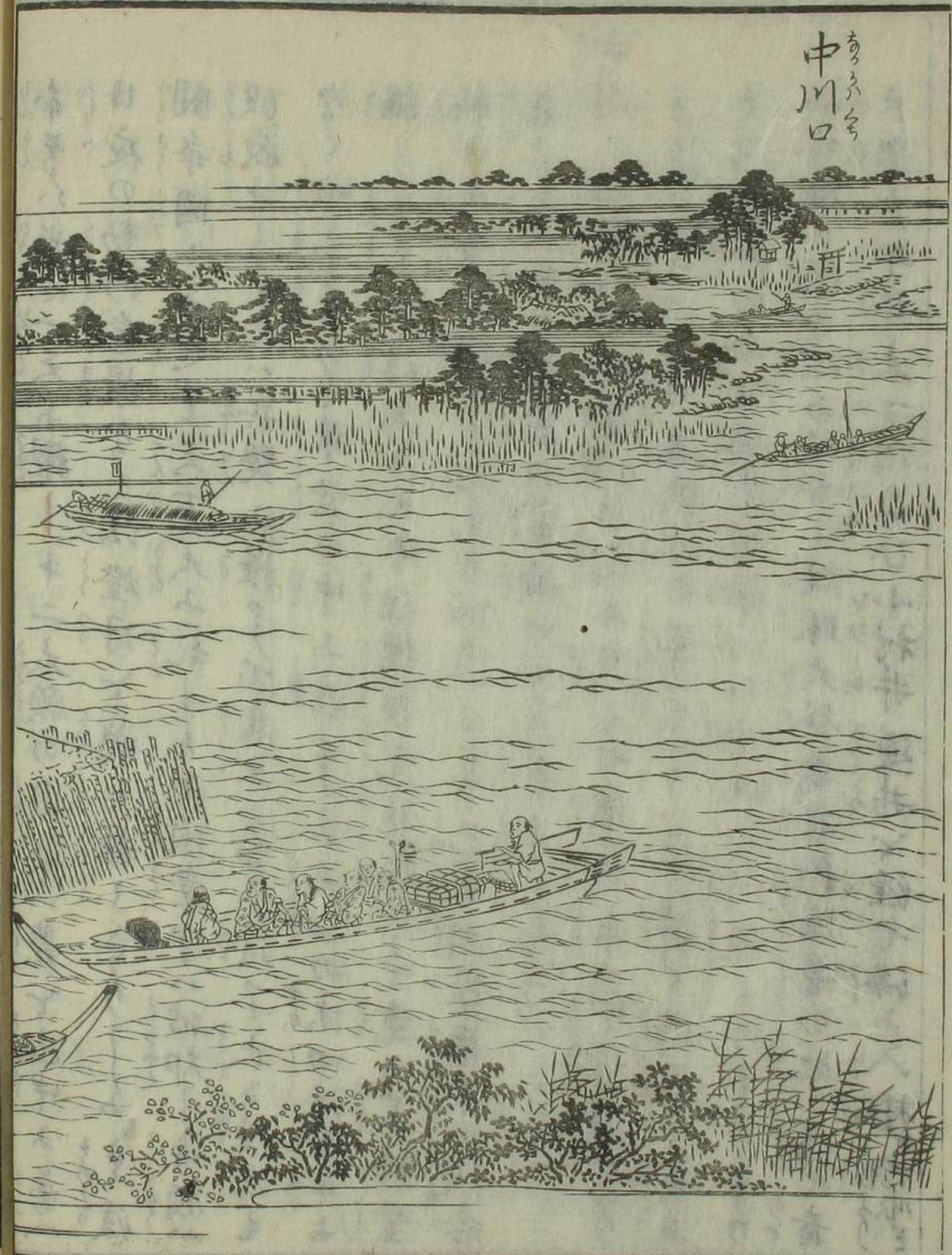
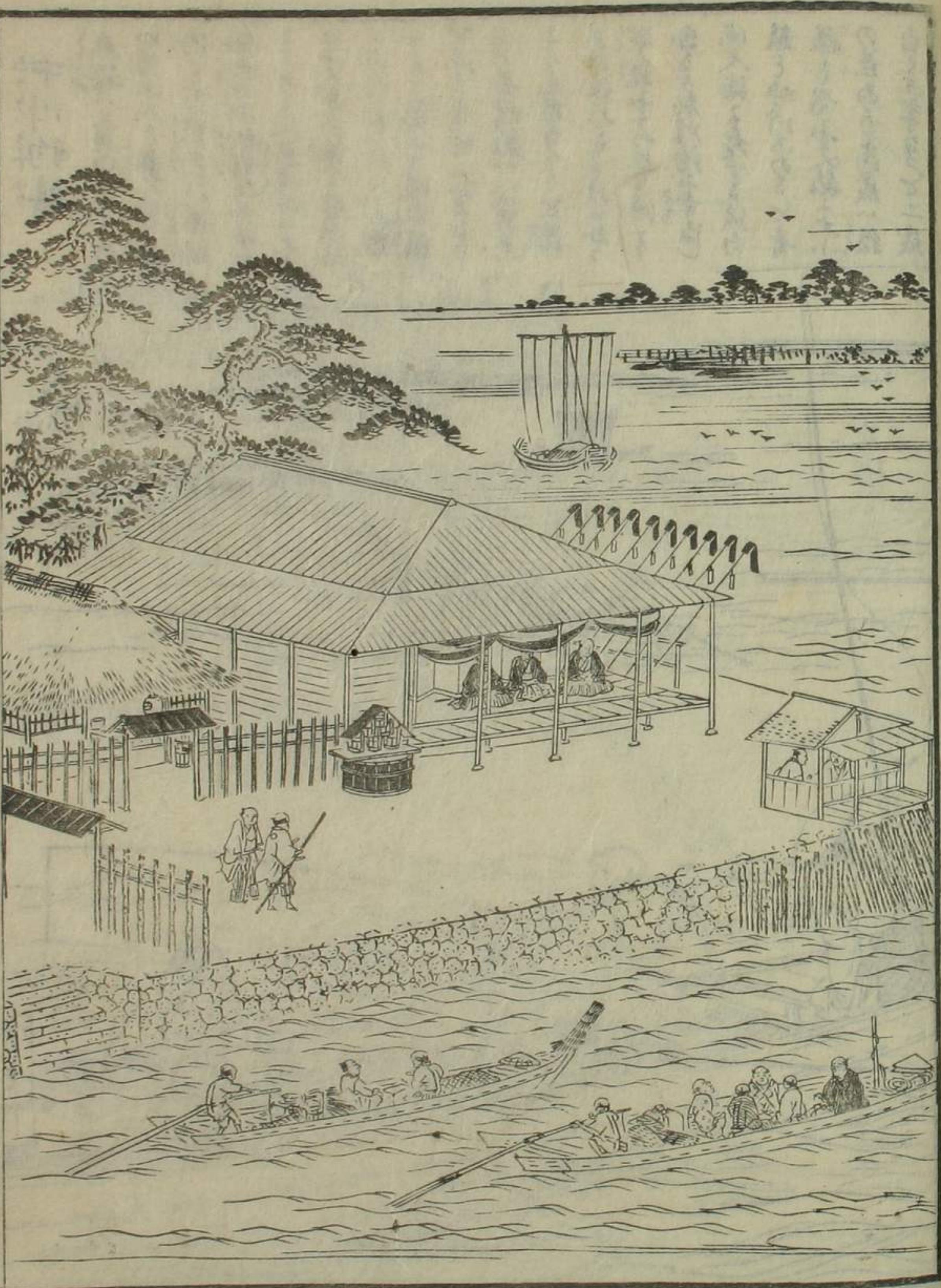
舊一菩信 血多像見國像鐘造靈告
無十薩僧朝灑造或綠遠偏樓營區弟

本尊緣起曰延脣年間傳教大師東國化益の為叡山於
藥師佛と彫刻を漸歩ゆ頃一夜此像大師の義不告て曰く
汝う念の所の如く我東國の衆生と利益せんと明旦便あり
我西よりへと大師警き後覺ぬ然る明日下野國大慈寺の廣智
到る今之本下川の時よ偶然とて一の老翁小蓬へと其名と唱翁と呼ぶ
明神翁欣然とて云く我靈像の到ると待ひ久しよろしく我某庵
小安きへと云智喜んて被像と翁よ附一又此地玉伽藍と建ひ
と告翁云時縁ゆゑ熟せひ汝且還と去と依て廣智を此ゆと
思ひ止と郷里小歸る爾後翁村民小語て云く後善知識ありて必
あふ来り候若と嘗ん我今西州小河を涉り若帰るあるゆ運
天際と見送る共よ深信誓首を垂後慈覺大師東國化導の時
武州小河を暫淺草寺の観音堂小宿すゆ一日白髪の翁あひ



大師小告て云く此所より東北ニ靈地あり藥師乃靈像成
安坐とひ畢て後方を失ふ大師東北と望ふ忽然として
瑞雲起ふ中ニ青龍現を依て奇異の思ひとる一澗小寺と號
至元ふもふ果して藥師佛の靈像あり此時村人等集ま來り
前之唱翁う言と告大師とて其人ありと称し終ふ合郡官吏
及び富民等財と傾けく寺院と建立せんとも則弟子慶寬よ
此地と附屬あり一ノ慶寬嘗構の志と勵一貞觀二年の春
至モ諸堂落成をあくに於て慈覺大師と岡山と稱一往古乃
瑞ふ因く山と青龍と号す朝廷其瑞應と聞ゆし田園百畝
と賜ひ永寺供ふ充む優惠心僧都二脇士及び十二伴將本の
縁と彫刻ありて佛前不安せむ又慶寬十二大願と表一
十二の衆徒と置十二院と合せて淨光寺と号すとあり
當寺ハ草創より已降九百四十有餘年と經る古刹也

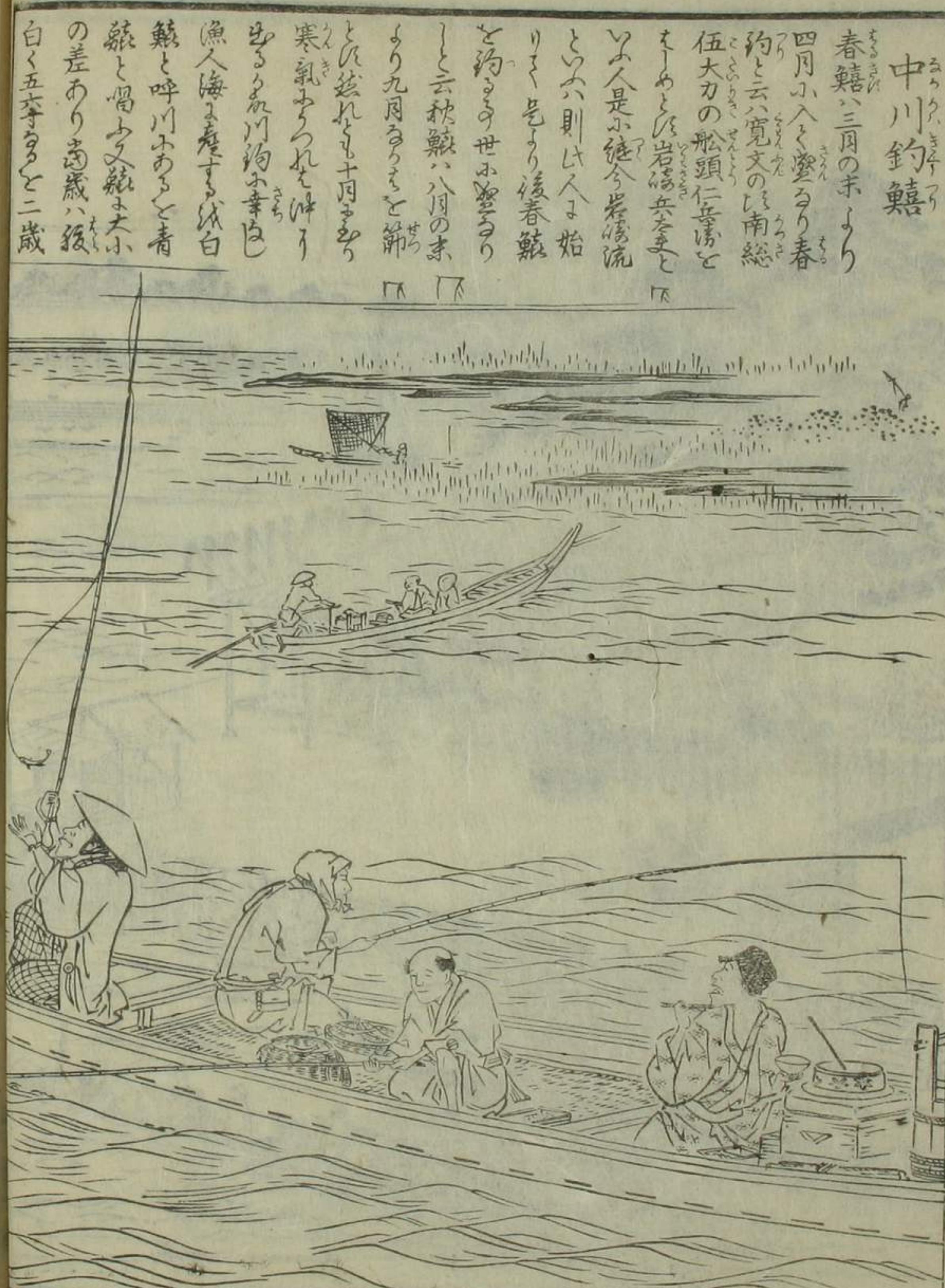
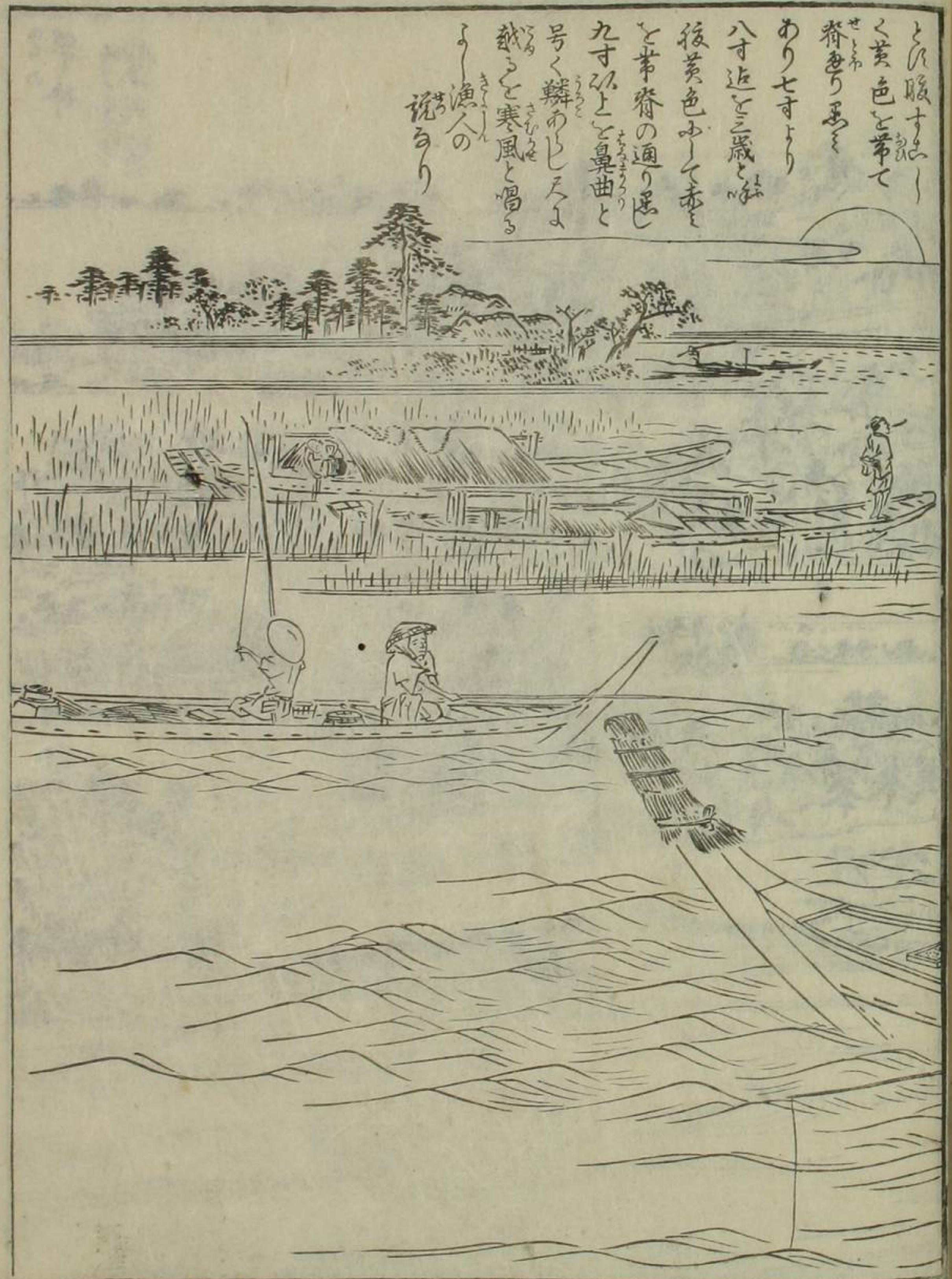
本尊ハ光と一天と耀一十二大願の衆徒ハ甍と山中ふ善
日夜の勤修怠慢を法燈月と越く赫く如火と似後
鬪爭國々起て天下大ふ乱きる頃堂宇ハ破却一寺領ハ
没収せざき又ハ兵燹ふ罹るて焦土とあり残らず止る住修も
なく唯本尊のみ草堂の仲ふ在せふ天正の末四海昌平又
歸一寺り一後同十九年住僧良完愁訴して竟ニ薬師堂
領の朱章と錫杖ねあらゆり一より己來國家泰平の祈念
急ぐゆあく本尊の靈驗いゆく著一とゆ
中川 隅田川と利根川の間ニ夾まつて流す故ニ中川の号あり
とくこそ荒川の分流熊谷の邊よりもくちて遠く埼玉と足立
とく兩郡の合と流キ利根川の分流も川俣よりもくちて
二水猿う保の辺を分岐塚大谷龜有新宿等の地ふ添て青
戸奥戸平井木下川及び小村井逆井と経て海ふ入る保と中川と

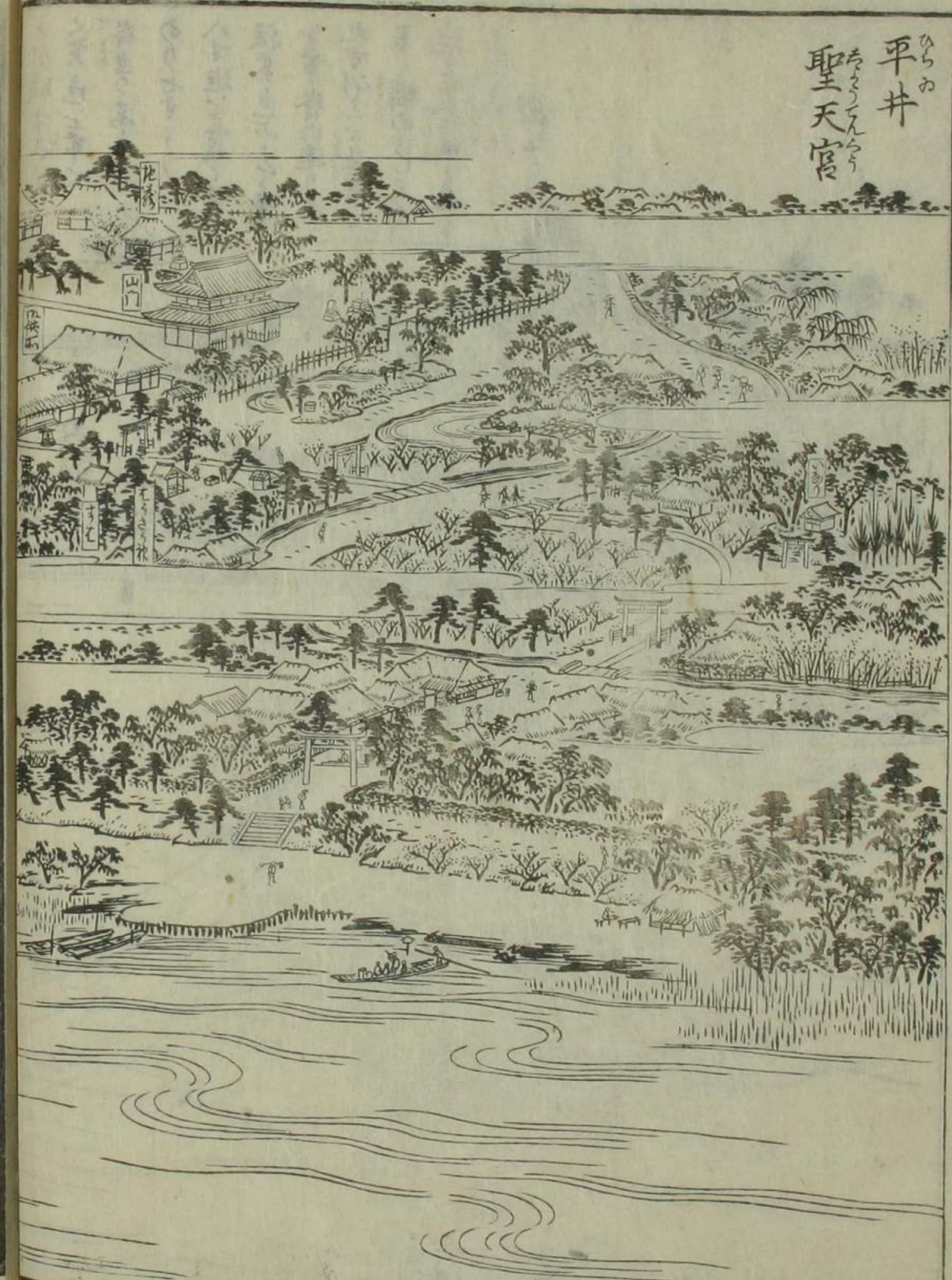
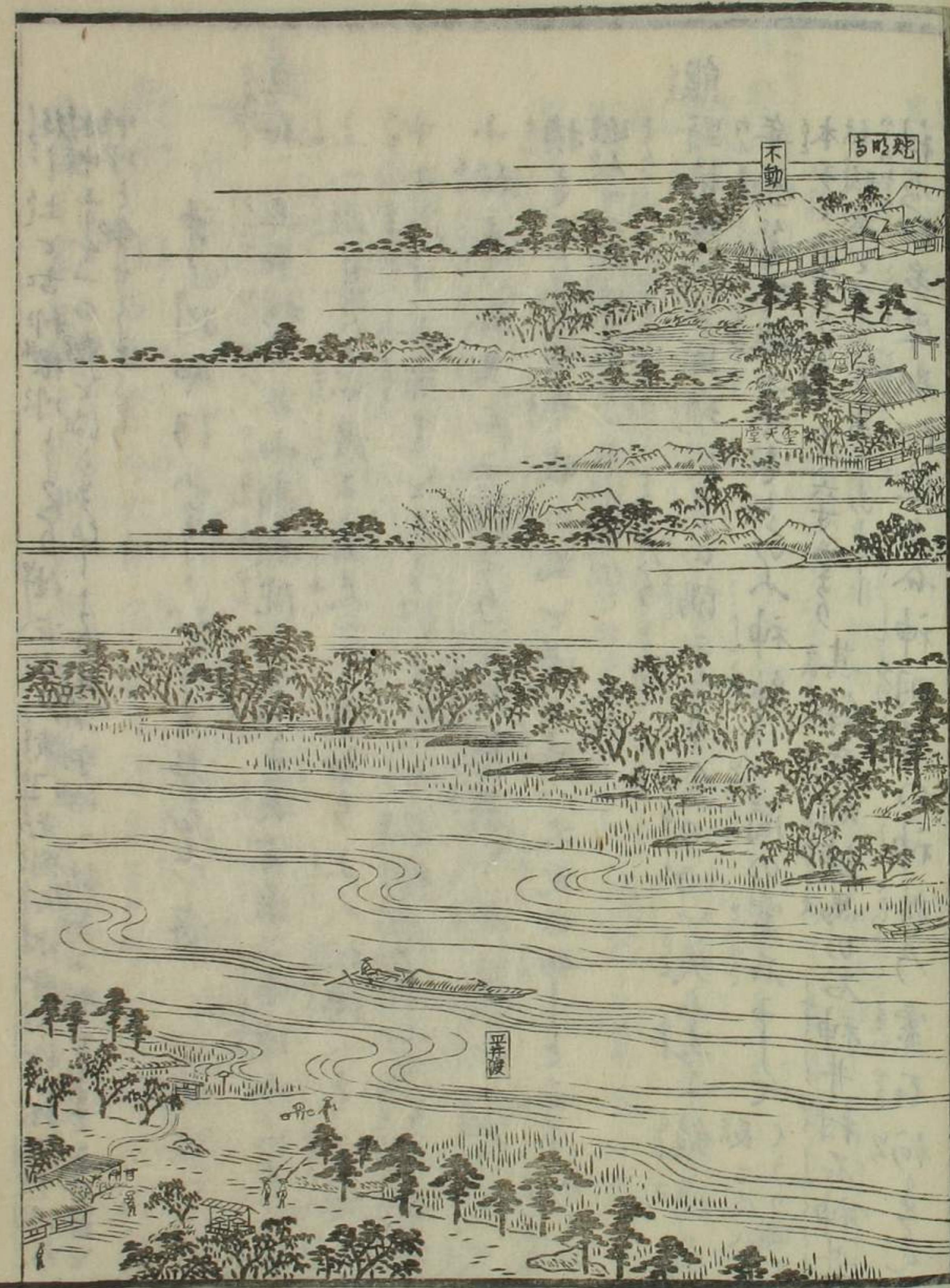


中川喜

中川釣喜

中川釣鱈
春鱈、三月の末より
四月小入と遡り春
約と云ハ寛文の頃南總
伍大力の船頭仁喜がと
をあわてて岩崎兵左衛門と下
よ人是小継今岩崎流
とつハ則け人より始
りと毛づり後春鱈
と約も世ふ遡り
と云秋鱈、八月の末
より九月のうちと節
と云然れども十月より
寒氣もすれど洋子
ゆるえ河内約ふ幸也
漁人海より產す、底白
鱈と呼川下あると青
鱈と呼川上あると青
の差あり萬歳、後
白く五六丈と二歳





中川上と古利根川より御古水戸黄門光圀水府入於の此中川乃
中川と命ぜり

中川やほへまどひてゆゆる白

嵐雪

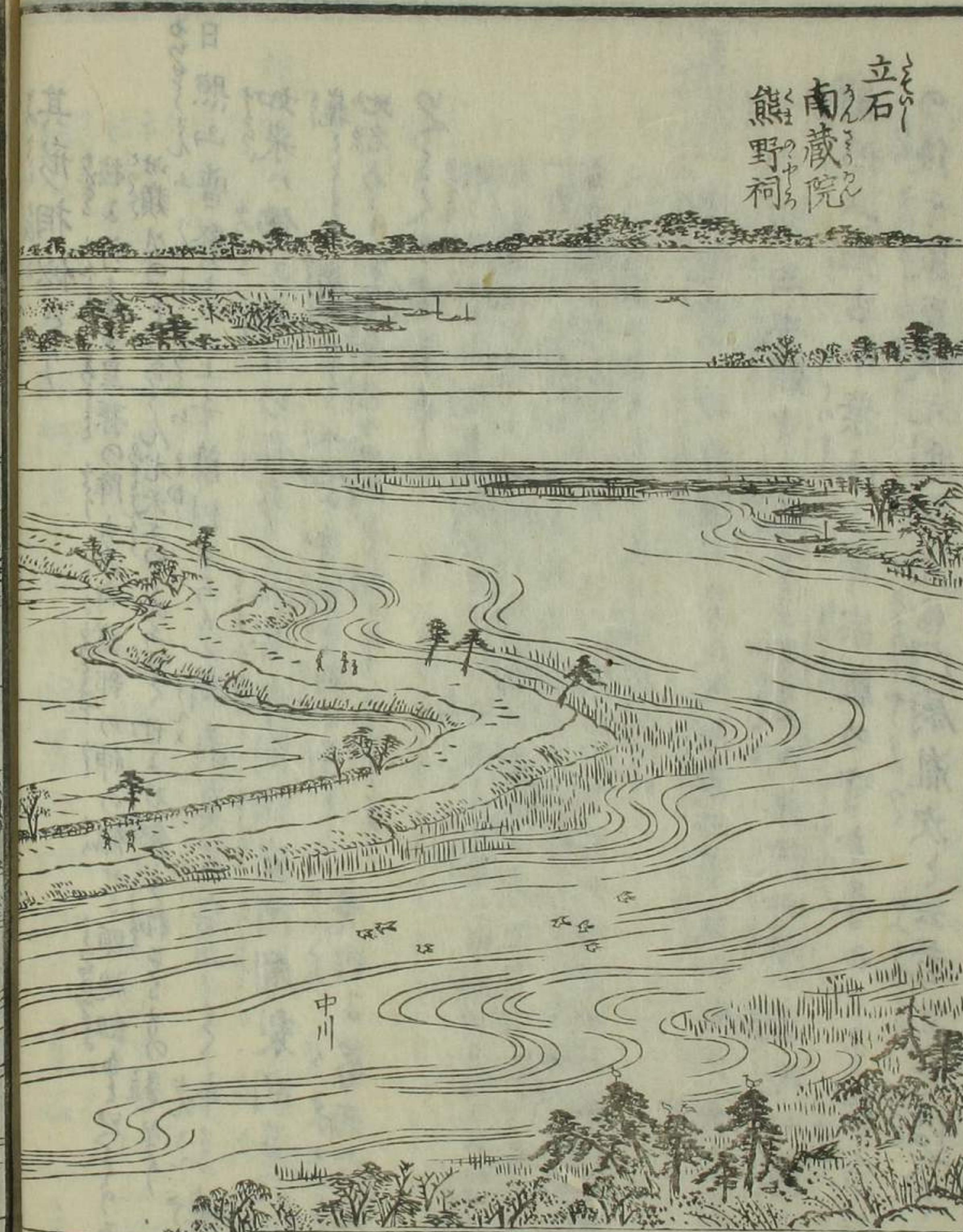
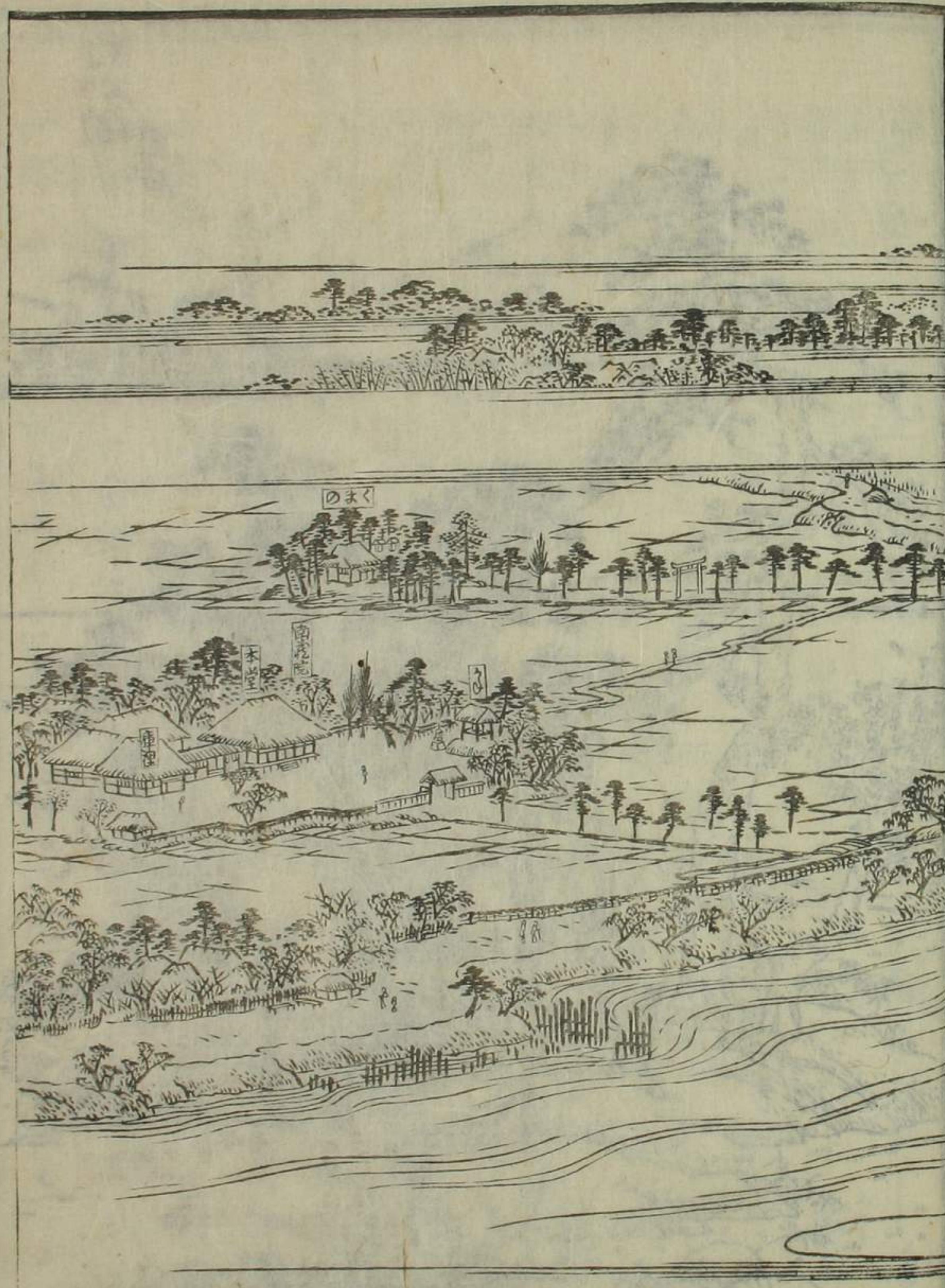
立石 立石村五方山南藏院より真言宗の寺境みゆり地
上へ頭をくの而縁又壹尺もくらりあり土人相傳云々石根地
中小入り其際とあはれとゆへり石質弱すて色世間
小称する鞍馬石小似くり此石寒氣と帶きハシカニ欠
損もされとも春暖の氣と得る時ハ又元の如くと云々有岩
遊行四五箇村の名より流は此村の名より立石分領とゆり

熊野權現祠 同境内艮の隅みゆり今曰地と失ふ處よ鎮座乃
年歴等と詳小せきとひ神軀ハ一箇の靈石にて長二尺八寸
本末二尺九寸未きて六寸重なり其餘武州練馬の石神井村石神井
城奉拝とつわらうあうあく此辺不普賢寺村と号むる
社又ひ多摩郡阿佐谷神明宮の神軀乃靈石仰きても

其形相似

按神事玉皇孫の降り時諸部の神の佩サヘ頭槌劍とゆきあり
此類ひのものあん尤天工のものく世よ石劍と稱するの是なり
日照山普賢寺上千葉村より新義真言宗ゆく本尊藥師
如來ハ佛工春日の作なり弘安年間法空阿闍梨開基に従古
龕と廣大なり此辺不普賢寺村と号むる 境内より葛西六郎と
地名あり當寺食邑の田路あり其處よりとす
り人の墳墓あり

真光山善通寺 遂井渡口より八九町東の方東小松川村より
一向宗西本願寺より属せり本阿弥陀如來ハ来迎の像あり
相傳より往古千葉介太郎宗胤の守本もゆゑく宗胤没落
の後モ家臣秋元刑部左衛門尉胤次と云者是を傳へテ歳



立石村
立石



因と歴りを後親鸞上人胤次う家小止宿せらまく一頃
胤次上人の宗化小帰一室と嘗て此本もと安す然
永正年間兵火ふ羅堂宇悉く焦土とありしうと本もと
持退て恙無とあり天下承平の時ふより終々一室と開く
善通寺と号くとつり秋元刑部左衛門の子孫今も此村の半四十有
阿弥陀如来画像一幅中將姫製もとあり物地ハ織の縁かげて御首の
八日より同十日迄此像と脚く諸人よ相せむ注古
賊難ふ逢とりとも威異のすりて失ひゆきり
十字名號一幅此号影と書て缺へまくとあり金も倣くてあ寺ある
醫王山妙音寺 東一江村小山り真言宗ゆて建久元年秀榮
上人開創もと不の精舍かり阿弥陀如来と本尊とてあ寺お安置
の茶師如東ハ立像ゆて佛工春日の彫造なりと云傳又神古故世
安房守某ゆる人の念持佛ゆて靈感の寺像ありと云、辨成天
北宮ハ堂前池の中島ふありて寺記小寶治元年丁未勅請もと云

賓頭盧尊者像

堂中小安置を寺僧付へて
佛工春日の作ありといひ
言ふ一尺もあり荒木造り
みてぞもむき容貌甚異相あり



本覺山妙勝寺

西

二の江

村古川の通

り少

いり

日蓮宗

にして中

山

の

一

鶴

寺

葛

西

の

觸

頭

あり

草創

み

て

宗

祖

大士

の

像

ハ

日祐

上人

の

作

なり

三

組

あり

延

元

年間

或ハ

徳治

二年

日尚

上人

乃

中

山

累

世

貴

王

より

始

ら

不

の

證

狀

數

通

あり

水

神

宮

日尚

上人

ハ

嵐

寺

開

創

の

主

不

知

れ

て

平

氏

の

本

裔

と

云

く

水神宮

日尚上人ハ嵐寺開創の主不
知れて平氏の本裔と云ふ安七年甲申或ハ正應年乙
十四歳癸卯の夏いつゝ洞舟にて流され舟の堀江の浦小漂若せり此浦の
漁人五郎何某々の助け半て其生来と聞く自通家の某々かとふ述べてか
の如きの遠不中山の日高人とおして弟子のれどりけ也家得度を依り此地妙見山の
傍小草菴とひそかに廣宣流布の志頗なり此水神宮日尚上人初洞舟乗一此海上お
時漂蕩あり一頃深く水神小祈誓して皮浪の難と遭まつ報恩の事也此本尊と周刻
時上人の歎眼と見て激不退不一軒の滋味と見て身につきと





龍龜山淨真寺 清泰院と号す。上今井村渡口より二丁を下り西北少々、淨土堂にて縁山小属を鎌倉光明寺乃岡山記主禪師良忠當寺と草創。中興ハ増蓮社頃。上人源清和尚と号す。本尊ハ阿弥陀如來なり。

東庄産 或人安房の清澄と一見せよ。立つて江戸の坂の角田川の河舟みくに思ふ世。立つて江戸の坂の角田川の河舟みくに思ふ世。立つて江戸の坂の角田川の河舟みくに思ふ世。立つて江戸の坂の角田川の河舟みくに思ふ世。立つて江戸の坂の角田川の河舟みくに思ふ世。

琴
禪松 同境内堂前小おり。當寺。宿。天文十八年北条氏康

宗長

二之江
妙勝寺



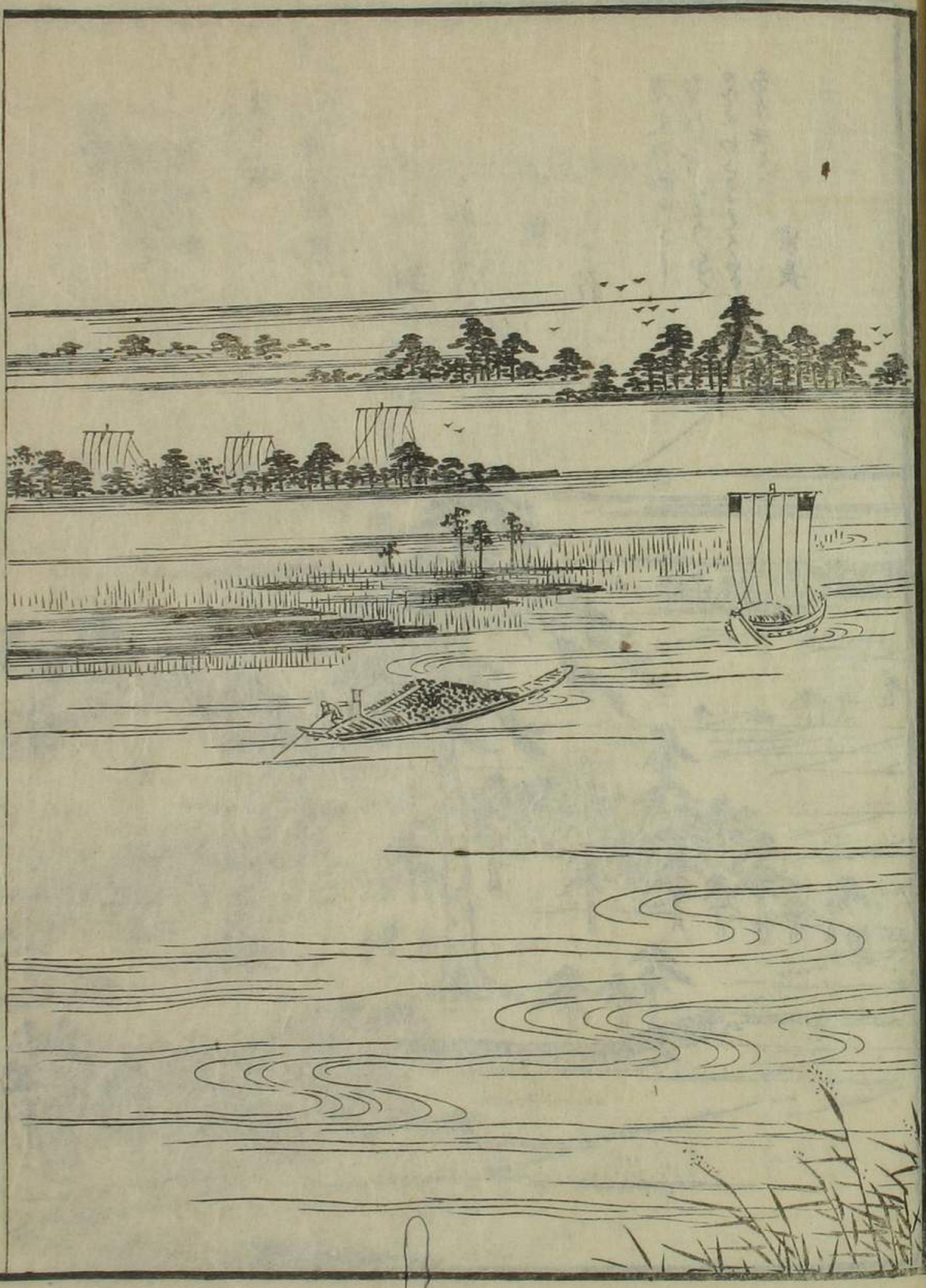
二の江より今井
舟宿桑川のわら
小庵毛海苔と
世ふ葛西海苔
と称も本草ふ
所謂紫菜の類
中て淡草海苔
ふ異なり



今井の津頭

柴屋軒宗長永正
年の記行東土産
隅田川の何舟よ
葛西の府のうち
葭芦をあき今ま
井とつ津より
下て淨土門の寺
淨與寺ふ立きて
とあれハをくす
此津の

あれ
たり



今井
淨興寺
琴彈松

東土産

ゆ士根

雪の
さくらぬ

千里

方丈の西小さ
かすみ雪うきよ
見もゆもちり
あり云々

宗長



和歌を詠せり是より後琴ひき松と号をとる
武藏野紀行
按氏康紀行不あるの准津寺の年八十有九
既ふ久一寺号ハ以て文字與と光との違ひあり
共本寺の文字淨興寺作ハ寺を天台止觀の法燈
下川の淨光寺ハ慈覺大師開創の精舍也
當寺ハ記主禪師の開基也曰より淨業の仙刹也
古社もあり又東土産云述るく當寺ハ西南の於遠くひげく芙蓉の峰相對
眺望也不疑長々句意よたるなり然る時ハ此山の經脈を明燈とす

ありひゆ

ね風のゆきさげはよしとあへことゆふをかくね

北条
氏康

天川山妙福寺 下鎌田村ふあり淨興寺の北二町半と隔一淨土
親鸞上人御影堂 本堂の前左の方より相傳ひ昔親鸞上人東國遊化の頃
宗申く上今井村金藏寺より属を中興開山ハ德誉豈公和尚と号
本尊ハ阿弥陀如來なり
親鸞上人御影堂 本堂の前左の方より相傳ひ昔親鸞上人東國遊化の頃
此地をよきりあふ時より年旱魃あり里民の農事甚く
三年暦浴の頃自身の肖像を造りて小残一置より毎歲四月八日より

天文十五年秋 小田原の

北條左京太夫氏康む

野小鷹狩の時 葛西の

淨興寺より一夜のやうと

とくられ松風入琴と

ごく和奇と題

を詠せり

武藏野

紀初

松風乃

吹きゑ

きけ

よ

よ

よ

よ

よ

北條氏康



同十日造佛龕を用ひ親鸞上人の御影を安置しも因道俗群集す
一木架裟懸松同一傍にあり旧樹ハ太子堂本堂の前右の方にありく
靈像を安置太子自ら作らせと云はゞ毎歲二月廿一日忌滿あり

帝釋天王柴又村經泉山題經寺ニ安置モ江戸より當寺へ寛永

年間の草創なり

縁起云當寺第九世日敬師在住の頃堂宇大に破壊せ師
深く是を歎き普く四方より行乞して再興の志を励む終より其
堂舎を改めんとする時梁上より此枝を得て曰當寺より
高祖大士手刻の祈禱文と称ゆるものを由云傳へる所
此時より空則乍るとぞとの事長二尺五
厚サ五分半ある梨板なり片面ハ中央より首題かよひ左右より四菩薩又病師
消滅等の數字を刻む其下より五月日とありく大士の号かよひ花押と印せり又序面ハ
帝釋天王の影像あり右の序より小鉢と持て左の序より開きて忿怒の相と能く
是除病延寿の本尊惡魔降伏の本尊なり信號の華より是と印しと書ふ黒墨
ありく希代の草書なり往古標の四天王寺より初く帝釋天降臨す
儀日申の日なり當寺の板を豈出現在もス庚申よりあると云ふ所因縁より此日と

